



奥山古墳群発掘調査報告書

2001年9月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団



奥山古墳群出土遺物



奥山古墳群付近（上空より）

図 版 目 次

- 巻頭1 奥山古墳群出土遺物
- 巻頭2 奥山古墳群付近（上空より）
- 図版1 [上] 1号墳調査前全景（南東より）
[中] 1号墳主体部検出状況
[下] 1号墳主体部土層断面
- 図版2 [上] 1号墳主体部完掘状況
[中] 1号墳土師器：坏出土状況（左下）
[下] 1号墳土師器：坏出土状況
- 図版3 [上] 1号墳完掘状況（北より）
[下] 1号墳出土土師器：坏
- 図版4 [上] 2号墳調査前全景（北より）
[中] 2号墳主体部検出状況
[下] 2号墳主体部上層断面
- 図版5 [上] 2号墳主体部完掘状況
[中] 2号墳墳丘東側土層断面
[下] 2号墳完掘状況遠景（北より）
- 図版6 [上] 3号墳調査前全景（南より）
[中] 3号墳主体部検出状況
[下] 3号墳鉄製品出土状況（鉄剣・鉄鏃）
- 図版7 [上] 3号墳主体部土層断面（南北）
[下] 3号墳主体部上層断面（東西）
- 図版8 [上] 3号墳主体部盗掘擴完掘状況
[中] 3号墳主体部完掘状況
[下] 3号墳西側墳裾土層断面
- 図版9 [上] 3号墳完掘状況遠景（南東より）
[下] 3号墳完掘状況近景（南東より）
- 図版10 [上] 3号墳墳丘基盤（南東より）
[下] 3号墳出土鉄製品：鉄鏃
- 図版11 3号墳出土鉄製品：鉄剣
- 図版12 [上] SX-01検出状況
[中] SX-01完掘状況（北北西より）
[下] SX-01完掘状況（南より）
- 図版13 [上] 4号墳調査前全景（南より）
[中] 4号墳南側の溝検出状況
[下] 4号墳南側の溝完掘状況
- 図版14 [上] 4号墳完掘状況（南西より）
[中] 5号墳調査前全景（南東より）
[下] 5号墳主体部検出状況
- 図版15 [上] 5号墳主体部土層断面（東西）
[下] 5号墳主体部上層断面（南北）
- 図版16 [上] 5号墳土師器：直口壺出土状況
[中] 5号墳鉄剣出土状況
[下] 5号墳刀子出土状況
- 図版17 [上] 5号墳 鉄剣、鉄鏃、石出土状況
[下] 5号墳主体部完掘状況（北東より）
- 図版18 [上] 5号墳墳丘北側土層断面
[中] 5号墳墳丘南側の溝土層断面
[下] 5号墳墳丘南側の溝検出状況
- 図版19 [上] 5号墳完掘状況遠景（南より）
[下] 5号墳完掘状況近景（南東より）
- 図版20 [上] 5号墳墳丘基盤（南より）
[中] 5号墳小土壇検出状況
[下] 5号墳小土壇完掘状況
- 図版21 [上] 5号墳出土土師器：直口壺
[下] 5号墳出土鉄製品
- 図版22 5号墳出土鉄製品：鉄剣
- 図版23 [上] 6号墳調査前全景（南より）
[中] 6号墳南側の溝検出状況
[下] 6号墳南側の溝完掘状況
- 図版24 [上] 6号墳墳丘西側墳裾完掘状況
[中] 6号墳完掘状況遠景（南より）
[下] 6号墳完掘状況近景（南東より）

插图目次

第1图	松江市位置图	1
第2图	奥山古墳群位置图	1
第3图	奥山古墳群と周辺の遺跡	2
第4图	運動公園造成前調査地付近地形測量图	5~6
第5图	奥山古墳群調査成果图	7~8
第6图	奥山1号墳・2号墳調査前地形測量图	9
第7图	奥山1号墳調査成果图	10
第8图	奥山1号墳墳丘上層断面图	11
第9图	奥山1号墳主体部実測图	11
第10图	奥山1号墳川上土師器：环実測图	12
第11图	奥山2号墳調査成果图	13
第12图	奥山2号墳墳丘上層断面图	14
第13图	奥山2号墳主体部実測图	15
第14图	奥山3号墳調査前地形測量图	16
第15图	奥山3号墳調査成果图	17
第16图	奥山3号墳墳丘土層断面图	18
第17图	奥山3号墳主体部実測图	19
第18图	奥山3号墳出土鉄製品実測图	21
第19图	SX-01付近調査成果图	22
第20图	SX-01実測图	22
第21图	奥山4号墳・5号墳調査前地形測量图	23
第22图	奥山4号墳調査成果图	24
第23图	奥山4号墳墳丘十層断面图	25
第24图	奥山5号墳調査成果图	26
第25图	奥山5号墳墳丘土層断面图	27
第26图	奥山5号墳主体部実測图	28
第27图	奥山5号墳小上墳実測图	30
第28图	奥山5号墳出土土師器：直口壺実測图	30
第29图	奥山5号墳出土鉄製品実測图	31
第30图	奥山6号墳調査前地形測量图	32
第31图	奥山6号墳調査成果图	33
第32图	奥山6号墳墳丘十層断面图	34

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	3
III	調査の経過と概要	4
	(1) 1号墳	10
	(2) 2号墳	15
	(3) 3号墳	19
	(4) SX-01	20
	(5) 4号墳	24
	(6) 5号墳	25
	(7) 6号墳	33
IV	小 結	35

例 言

1. 本書は、平成12年度、13年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した奥山古墳群発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松江市都市建設部公園緑地課から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施したものである。
3. 調査組織は以下のとおりである。

依頼者 松江市都市建設部 公園緑地課

主体者 松江市教育委員会

(12年度) 教育長	伊藤忠志	(13年度) 教育長	山本弘正
副教育長	神田義之	副教育長	友森勉
生涯学習課長	川原良一	文化財課長	岡崎雄二郎
文化財室長	岡崎雄二郎	文化財係長(主幹)	吉岡弘行
文化財係長(主幹)	吉岡弘行	調査係長	飯塚康行
主任主事	古藤博昭	主任主事	古藤博昭

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課

理事長	松浦正敬
専務理事	米田喜雄
常務理事	福井勝美
事務局長	柳浦孝行(12年度)
事務局長	吉岡正夫(13年度)
調査係長	瀬古諒子
調査補助員	勝部文生(12年度)
調査補助員	廣江光洋(13年度)

調査者

4. 調査の実施にあたっては次の方々の指導と協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。
渡辺自幸(松江市文化財保護審議会委員考古学担当)、椿貞治(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)、池淵俊一(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)、角田徳幸(島根県教育庁埋蔵文化財センター)、松山智弘(島根県教育庁埋蔵文化財センター)
5. 出土鉄製品のX線写真撮影については島根県教育庁埋蔵文化財センター文化財保護主事間野大丞氏に依頼し、同氏と同センター調査補助員澤山正明氏により実施していただいた。
6. 遺物の復原、実測及び浄書は花田陽子、福田万里が行った。
7. 遺物の写真撮影は島根県埋蔵文化財調査センターの撮影場を借用し石川崇、廣江が行った。
8. 出土遺物は松江市教育委員会生涯学習部文化財課で保管している。
9. 本書の執筆、編集は瀬古と協議の上、廣江が行った。

I 調査に至る経緯

平成11年度において松江市公園緑地課（事業者）は、松江市街の南西に位置する松江総合運動公園内にテニスコートの建設を計画した。現在、同公園内には8面のテニスコートを有するテニスコートが設置されているが、平成16年度に島根県において開催予定の全国高校総体に対応するため、さらに8面のテニスコートの増設が必要となり本計画が持ち上がったものである。

このテニスコートの建設予定地内では「総合運動公園内古墳群」の存在が以前から知られていたが、規模、員数等の詳細が不明であることから、松江市教育委員会で現地調査を行ったところ、古墳推定地として9箇所を確認した。

このうち最も南側に位置する1箇所を除く8箇所が造成計画の範囲に含まれることから、当市教育委員会でこれらの地点について平成11年11月15日から12月15日にかけて試掘調査を行った。

その結果、これら古墳推定地8箇所のうち3箇所が古墳である可能性が高いと考えられたことから、これらの箇所について全面発掘調査を実施することとなった。

本遺跡の発掘調査は遺跡名を「総合運動公園内古墳群」から「奥山古墳群」と改め、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。調査期間は平成12年12月4日から平成13年3月31日、平成13年4月9日から同年6月25日である。

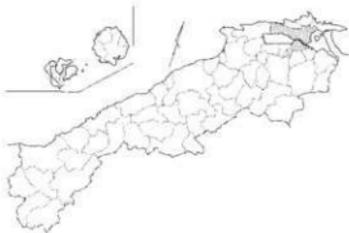
平成13年度において事業者より松江市教育委員会に造成計画変更の協議があった。

その内容としては、当初造成計画外であった古墳の存在する箇所を計画範囲に含め、場内を廻る園路を設けるものであった。しかし、テニスコート本体部分にかかる造成ではないことから、また、遺跡保護の観点から当市教育委員会は事業者に対し古墳の現状保存を要望した。

両者協議の結果、事業者の理解と協力が得られ、園路の設計見直しによって古墳は現状保存されることとなった。

なお、現状保存となった古墳については「奥山7号墳」と呼称し、本報告書中にその所在を標すものである。

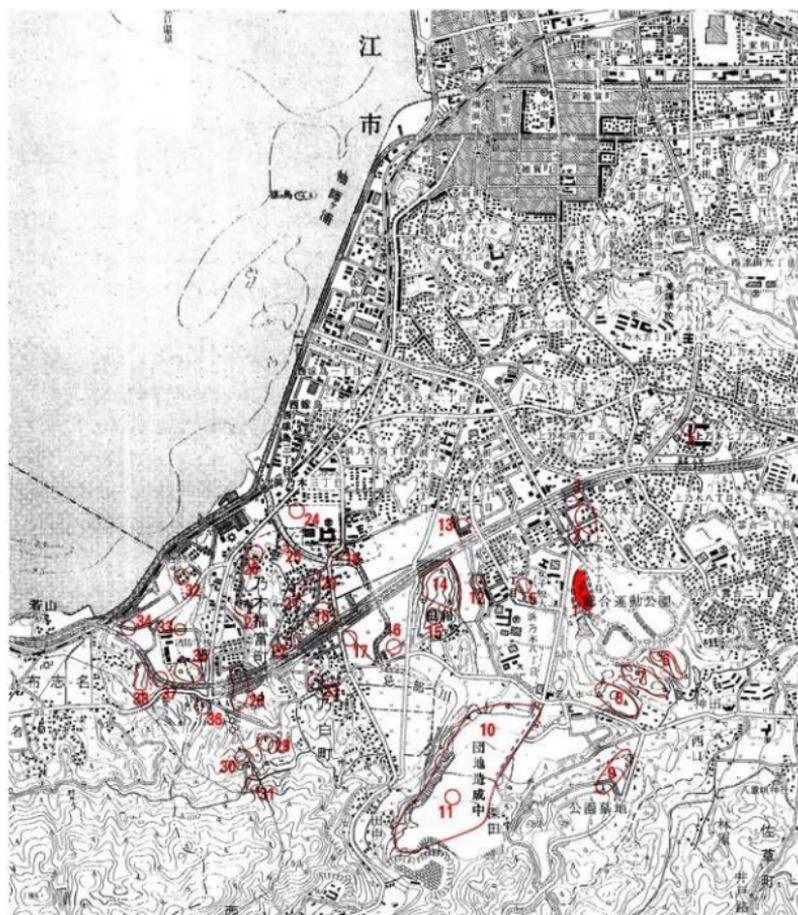
（古藤博昭）



第1図 松江市位置図



第2図 奥山古墳群位置図（1：100000）



第3図 奥山古墳群と周辺の遺跡

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|
| ①奥山古墳群 | ①①普沢谷横穴墓群 | ②①厚形古墳群 | ③①岩屋口古墳群 |
| ②長砂古墳群 | ②②後友田古墳 | ②②乃口玉作遺跡 | ③②二名留古墳群 |
| ③乃木下子塚古墳 | ③③友田遺跡 | ③③松本修法権遺跡 | ③③大角川遺跡 |
| ④向荒神古墳 | ④④田沼山遺跡 | ④④欠田遺跡 | ④④布志名人谷Ⅱ遺跡 |
| ⑤奥山遺跡 | ⑤⑤田沼山1号墳 | ⑤⑤門田遺跡 | ⑤⑤人角川古墳群 |
| ⑥神田遺跡 | ⑥⑥印前遺跡 | ⑥⑥神立遺跡 | ⑥⑥すべりさこ古墳群 |
| ⑦勝負谷遺跡 | ⑦⑦雲田遺跡 | ⑦⑦廻田遺跡 | ⑦⑦才の神遺跡 |
| ⑧流ヶ谷遺跡 | ⑧⑧福富Ⅰ遺跡 | ⑧⑧松本古墳群 | ⑧⑧布志名大谷Ⅰ遺跡 |
| ⑨小倉見谷横穴群 | ⑨⑨福富Ⅱ遺跡 | ⑨⑨弥陀原横穴墓群 | |
| ⑩段尻遺跡群 | ⑩⑩蓮華田遺跡 | ⑩⑩松本横穴墓群 | |

Ⅱ 遺跡の位置と環境

奥山古墳群は、松江市上乃木10丁目4-1番地の松江総合運動公園内に所在する標高30m～35m、南北に延びる低丘陵地に位置する。市街地からは南へ3.0kmの地点である。丘陵地は南側の尾根基部から北西に標高30mの起伏の少ない地形が60m続く。そして尾根は30m程鞍部が続き新たに標高35mの低丘陵が北に30m伸びる。更に尾根は北へ80m降るように伸び、北端部の標高は25mを測る。周辺は北から東が開け北西に宍道湖を望み松江市南部の市街地を一瞥できるほどの眺望である。南から西は運動公園の各施設、学校関連の建物が立ち並び背後には中規模な山脈が連なる様相である。近年この遺跡の周辺地域は、松江市でも屈指の開発地域であり、それに伴う発掘調査で様々な遺跡が分布していることが明らかとなっている。

旧石器・縄文時代 現在この時代に該当する遺跡の発見例はないが、忌部川下流域に所在する廻田遺跡から玉髄のナイフ形石器（旧石器時代）が採取されている。また福富Ⅰ遺跡からは黒曜石製の尖頭器をはじめ黒曜石を中心とした剥片、石器が多数採取されている。今後この時代の遺跡が発見される可能性が考えられる。

弥生時代 この時代の遺跡は忌部川下流域周辺に多く分布している。欠田遺跡（24）は前期～後期までの遺跡で大型石包丁、磨製石斧をはじめ多くの上器片が出土している。田和山遺跡（14）は前期末～中期後半まで営まれた環壕遺跡である。環壕は丘陵を三重に廻らされ、その山頂部では物見櫓と思われる掘立柱建物跡1棟、総柱建物跡1棟、柵列と思われる多数の柱穴が検出されている。遺物は環壕内のつぶて石とともに壺、甕、高坏などの土器類、環状石斧、銅剣型石剣の破片などの石器類、黒曜石、サヌカイト製の石鏃など多種多数出土している。遺跡の性格は未解明な点が多いがこの地が弥生人にとって重要な要所であったことがうかがわれる。友田遺跡（13）は中期から後期の遺跡で上城墓26基、墳丘墓6基、四隅突出型墳丘墓1基が検出されている。その他、廻田遺跡（27）では後期後半の円形竪穴式住居跡1棟、福富Ⅰ遺跡（18）では後期の竪穴式住居跡5棟、門田遺跡（25）では中期中葉～後期の溝状遺構を検出し、雲垣遺跡（17）では中期後半～後期前半の土器類をはじめ田下駄を中心とした木製品を出土している。今後更にこの時代を解明する貴重な資料が多数発見されるものと思われる。

古墳時代 前期の古墳は袋塚遺跡群（10）の袋塚4号、7号、8号墳がある。このうち4号墳、8号墳は合わせ冨の土器棺が出土している。中期の古墳では7基の古墳から構成される大角山古墳群（35）があり中でも1号墳は全長61.4mと出雲東部でもトップクラスの前方後円墳である。墳裾より円筒埴輪片を出土している。長砂古墳群（2）は方墳、円墳16基から構成される古墳群で、そのほとんどが墳丘盛土の上層に不整形な長方形上墳を掘り込むことが特徴的である。鉄器類、玉類をはじめ土器では甕が6個体出土している。遺跡としては玉生産遺跡の大角山遺跡（33）がある。竪穴式住居5棟を検出し、土師器とともに碧玉製勾玉、管玉未製品、瑪瑙製勾玉未製品を出土している。この他、乃白玉作遺跡（22）、福富Ⅱ遺跡（19）など玉生産遺跡は八束郡玉湯町の花仙山を背景に忌部

川、卡湯川流域に多数分布している。後期の古墳は田和山1号墳(15)の横穴式石室を持った全長20mの前方後円墳や岩屋古墳群(31)がある。このころになると横穴墓の造営が多く見られ奥山遺跡(5)、袋尻遺跡(10)、菅沢谷横穴群(11)、弥陀原横穴群(29)などが知られている。いずれも6世紀後半～7世紀初頭の造営で須恵器、鉄器類の副葬品が出土している。遺跡では布志名大谷1遺跡(38)から製鉄関連の炭窯と言われる横口付炭窯が県内では初めて発見されている。

歴史時代 この時代の遺跡の発見例はあまりなく、松本古墳群(28)、オノ神遺跡(37)で古代山陰道の「正西道」推定ルートと思われる古代道の遺構が検出されている。

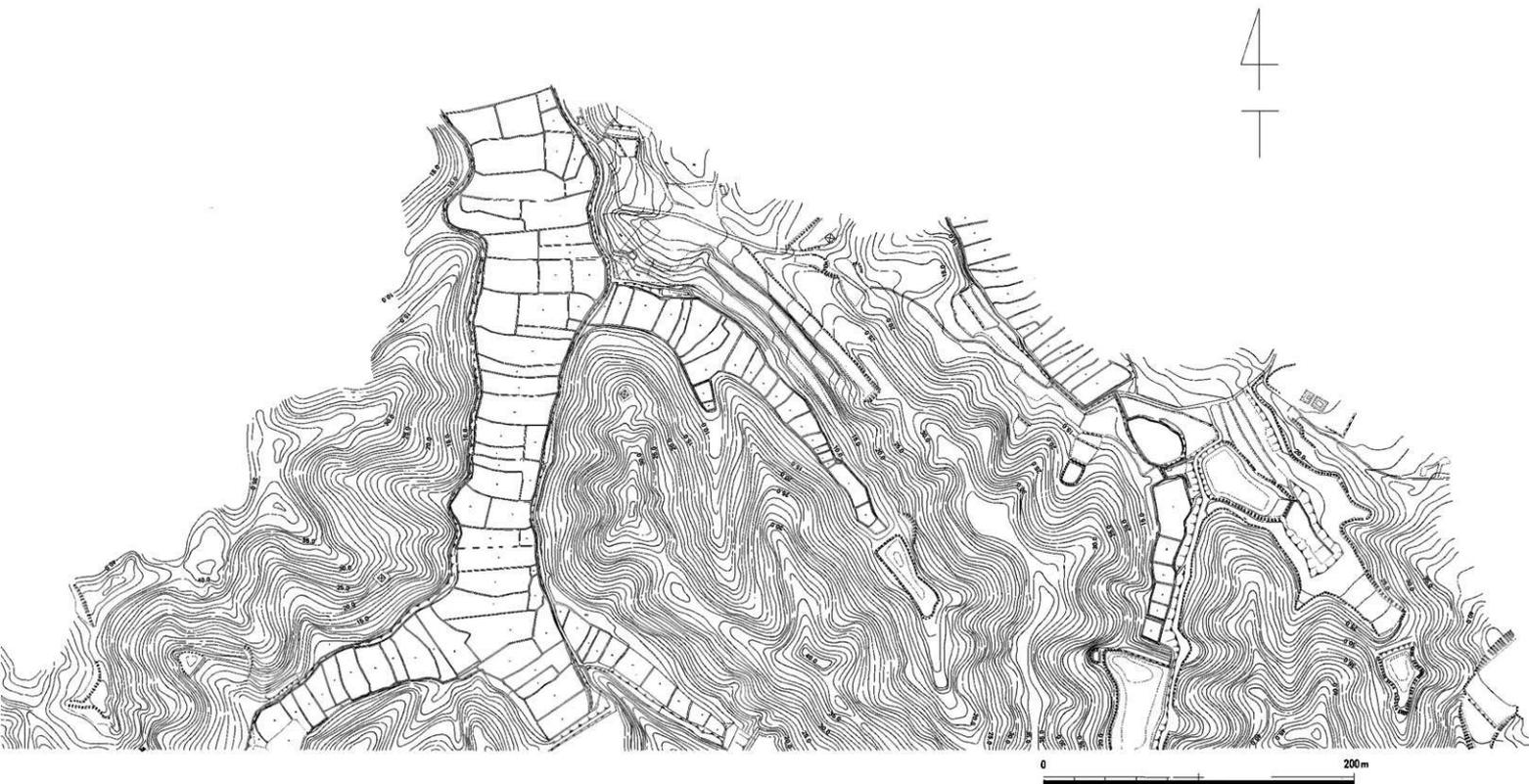
Ⅲ 調査の経過と概要

12年度の現地調査は尾根基部の1号墳推定地と標高35mの低丘陵地に位地する2箇所の古墳推定地を実施した。調査の結果古墳2基(1号墳・3号墳)、土壌1基(SX-01)を発見した。SX-01は当初古墳として調査したが古墳としての根拠が乏しいため古墳ではないものと判断した。3箇所の調査が終了した時点で現地指導会を実施したところ、この3基以外にも尾根の起伏部が古墳である可能性があり確認のため尾根筋にトレンチを入れる必要性が指摘された。そのため平成13年4月よりトレンチ調査を実施した結果、1号墳北側に1基(2号墳)とSX-01の北側の尾根筋に3基(4号墳・5号墳・6号墳)が新たに発見された。4号墳、6号墳は既に主体部が失われている可能性が高い為墳丘の規模を把握する補足的な調査とし2号墳、5号墳を中心に本調査へと移行した。

各古墳の概要は下記の表1に記す。

	墳 丘		主 体 部		出 土 遺 物 (出土場所)
	墳形	規模 (m)	平面形	法量(m)長×幅×深	
1号墳	方墳	6.4×5.6	長方形	1.9×0.5×0.1	土師器：環3個体(墳裾)
2号墳	不明	約10.0(南北)	長方形	2.6×0.6×0.25	
3号墳	円墳	8.3	長方形(推定)	2.2×0.85×0.2	鉄剣1口、鉄鏝2本(墓室内上層)
4号墳	円墳	7.5	流 失		
5号墳	方墳	12.0(南北)	長方形(一段目)	3.6×2.0×0.5	土師器：直1壺1個体(墓室内中層)
			長方形(二段目)	3.0×0.6×0.15	鉄剣1口、刀子1口、鉄鏝1本(墓室底)
6号墳	不明	約15.0(東西)	削 平		
7号墳				未 調 査	

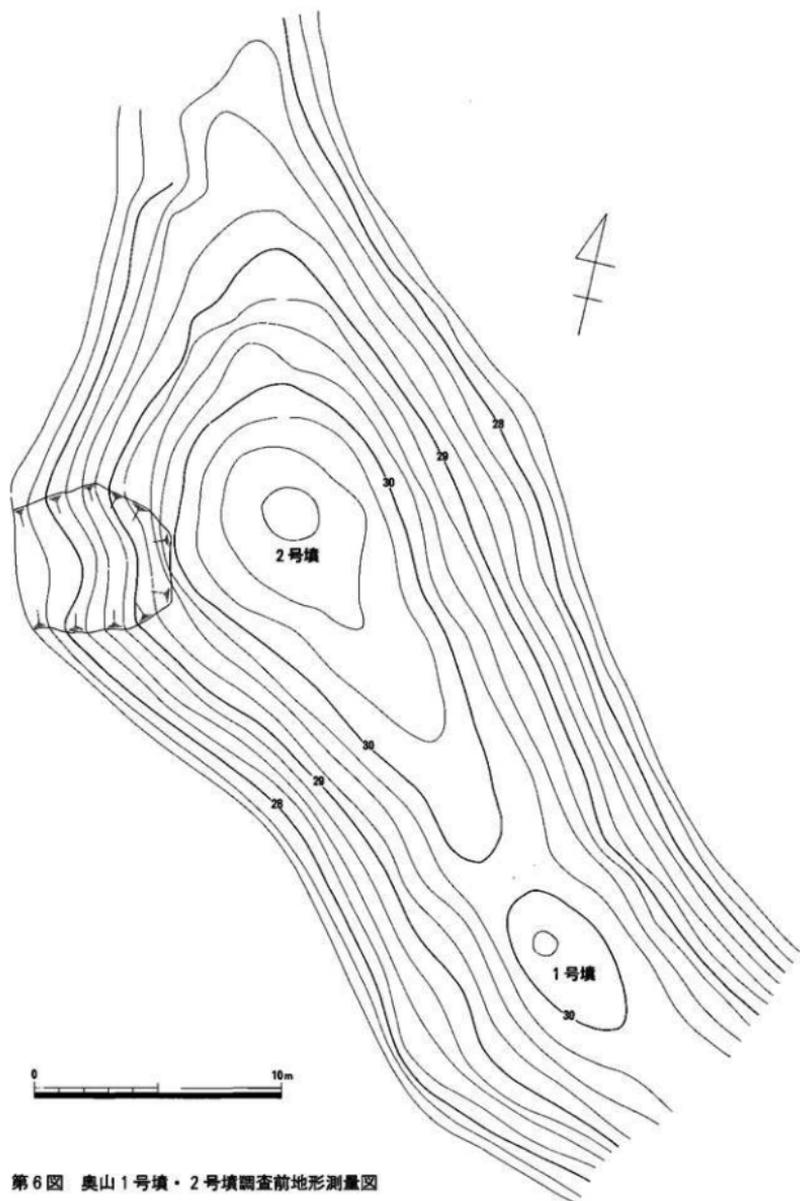
表1 奥山古墳群概要一覧



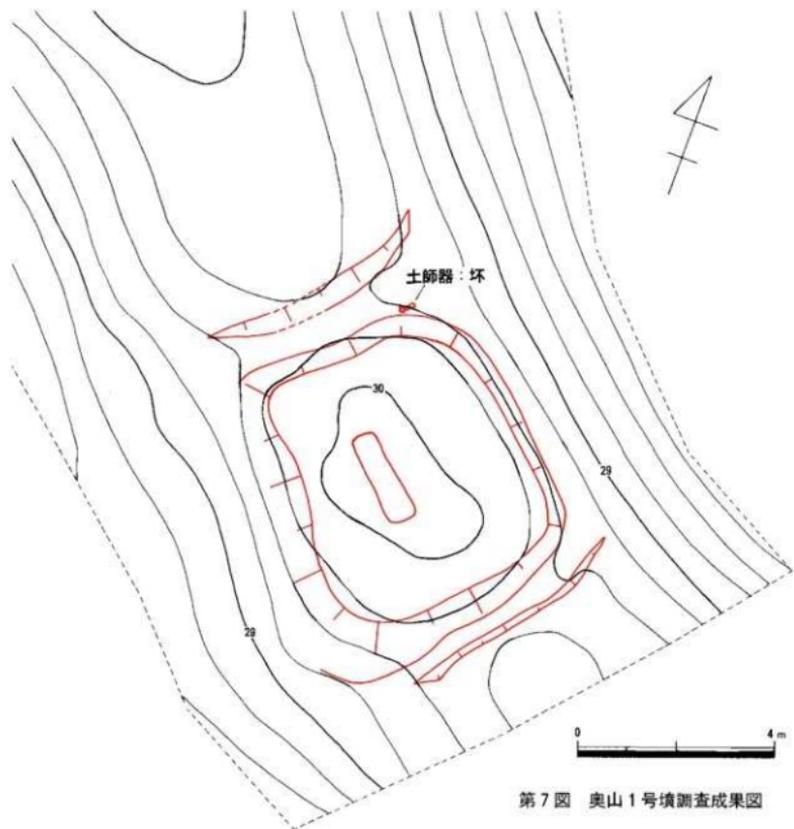
第 4 圖 運動公園造成前調查地附近地形測量圖



第5图 奥山古墳群調査成果图



第6图 奥山1号墳・2号墳調査前地形測量図



第7図 奥山1号墳調査成果図

(1) 1号墳

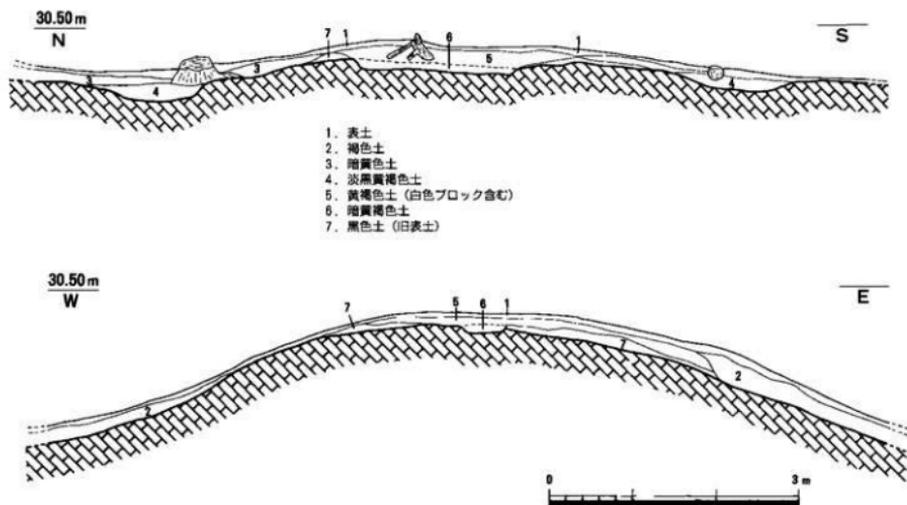
標高30m余りの起伏の少ない尾根上に築かれた小規模な方墳で、調査区外の7号墳と2号墳の間に位置している。

〔墳丘〕

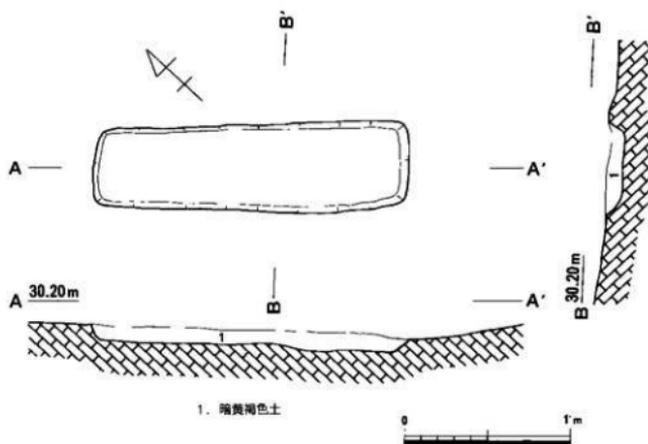
墳丘規模は南北長6.4m、残存高0.5mを測る。西辺は流失したものと推定され原形をとどめていないが、主体部を中心に東辺までの距離を反転すれば、東西長は推定5.6mとなる。

墳丘の北側と南側に尾根を切断する溝を掘り、墳丘を区画している。北側の溝は上端幅1.4m、下端幅0.8m、深さ0.2mを測り、南側の溝は上端幅1.4m、下端幅0.65m、深さ0.15mを測る。いずれも浅い断面U字形を呈する。

南北の溝によって区画された旧表土面の中央部2×3m程の範囲をやや平坦に整えて墳丘基盤とし、



第8図 奥山1号墳填丘土層断面図



第9図 奥山1号墳主体部実測図

その中心に尾根に平行に主軸をとる墓壇を掘り込み、埋葬した後盛土を施している。盛土はかなり流失したものと見られ、調査時に確認できたのは、厚み約10～20cm程度であった。

〔主体部〕

上端幅0.48～0.55m、長さ1.9m、深さ0.1mの長方形土壇を掘り込み、墓壇とする。主軸はN-44°-Wである。木棺直葬と思われるが、その痕跡は検出できなかった。墓壇内埋土は暗黄褐色土に地山の白色小ブロックを含み、墓壇上の盛土と同一のものであった。墓壇内から副葬品等の遺物は出土していない。

〔出土遺物〕

北側溝の墳丘寄りで、土師器の坏3個体が、溝底にはば接し、並べ置かれた状態で出土した。また南側溝からも土師器片が出土したが、細片の為器種は不明である。

第10図1～3は土師器の坏である。いずれも口縁部は内湾し、底～体部は丸みを帯びるもので、1は口径10.4cm、器高5.4cm、2は口径10.5cm、器高5.3cm、3は口径10.15cm、器高4.9cmを測る。底～体部外面は多方向の強いナデ（指による？）調整が行われている。砂粒の動きはなく、へら削りによるものではない。口縁部内外面及び内底面はナデ調整である。胎土中には1mm以下の砂粒をわずかに含み、色調は橙茶色を呈する。

〔時期〕

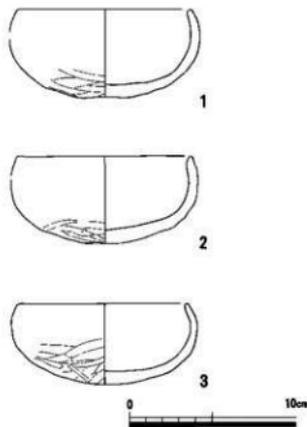
墳裾で出土した土師器の坏は、溝底にはば接しており、埋葬時の関連遺物と見られる。墳裾に土師器の坏を並べ置く例は八雲村の増福寺24号墳に見られる。5世紀後半から6世紀前半期の群集墳（増福寺古墳群）中の1基である。方墳と推定される墳丘の大半が失われ、主体部も残存していないが、南側溝から6個体の腕が各々接した状態で発見されている。口径11.2～12.0cm、器高4.7～5.4cmを測り、口縁部は内湾する。報告では薬師山古墳と同時期に位置付けられている。奥山1号墳のもの比べると、器高は変わらないが口径は一回り大きいようである。

古墳からの出土例は少ないが、住居跡や包含層からの出土例は松江市堤廻遺跡、大角山遺跡、大敷遺跡、八雲村前田遺跡、安来市柳Ⅱ遺跡、出雲市三田谷Ⅰ遺跡など数多くある。これらは須恵器出現以前から定型化須恵器併行期まで幅がある。

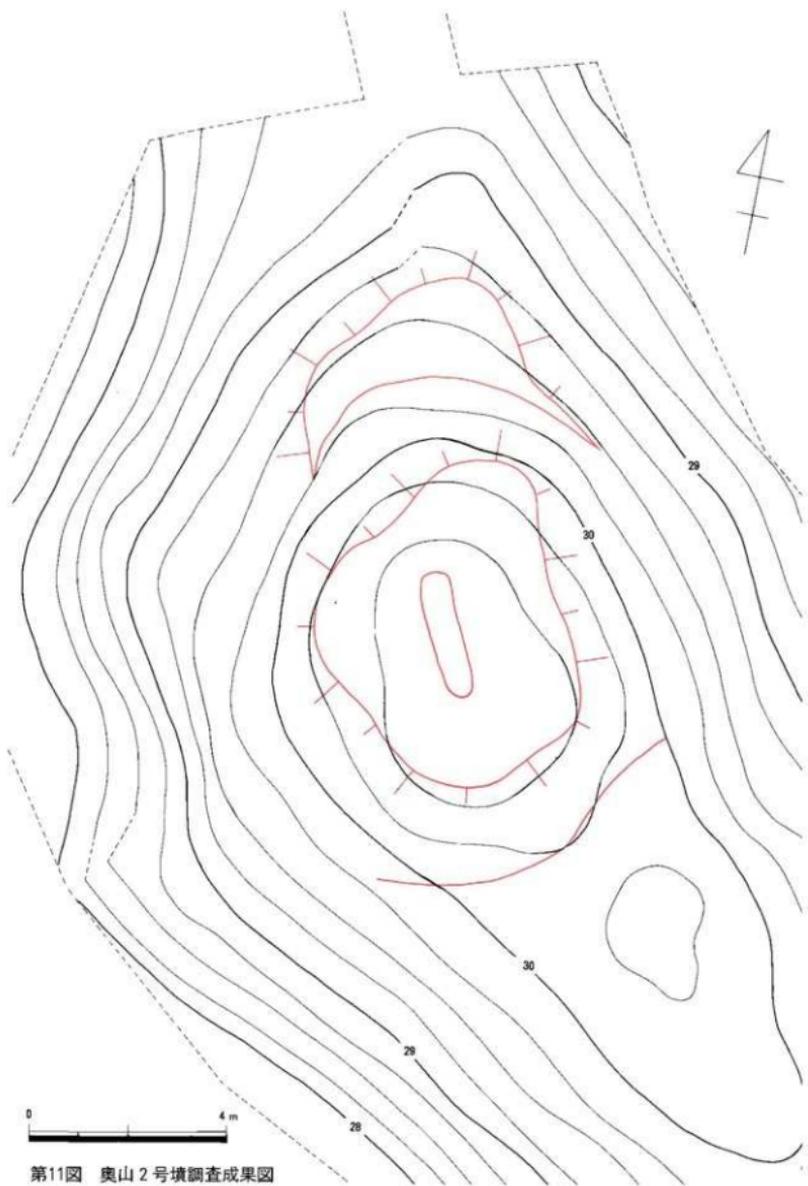
今回の出土品は他遺跡のものに比べて口径が小型化しており、口縁の内湾する特徴が著しいことから、松山編年Ⅳ期（註1）以降に属するものと考えておく。

従って、本古墳の築造は古墳時代中期後半の新しい時期であろう。

参考文献 註1 松山智弘「山雲における古墳時代前半期の土器の様相」『鳥根考古学会誌』第8集 鳥根考古学会 1991年

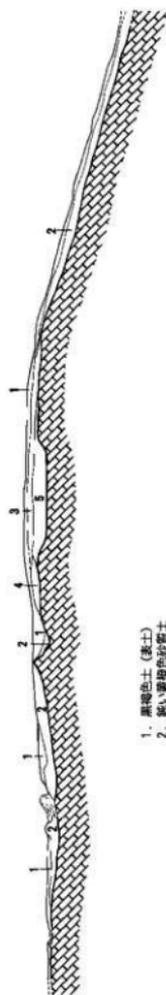


第10図 奥山1号墳出土土師器：坏実測図



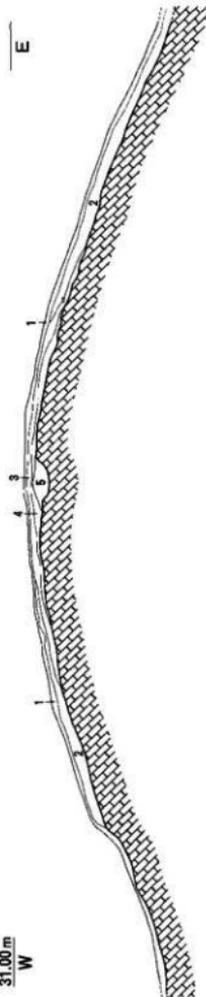
第11図 奥山2号墳調査成果図

31.00m
S

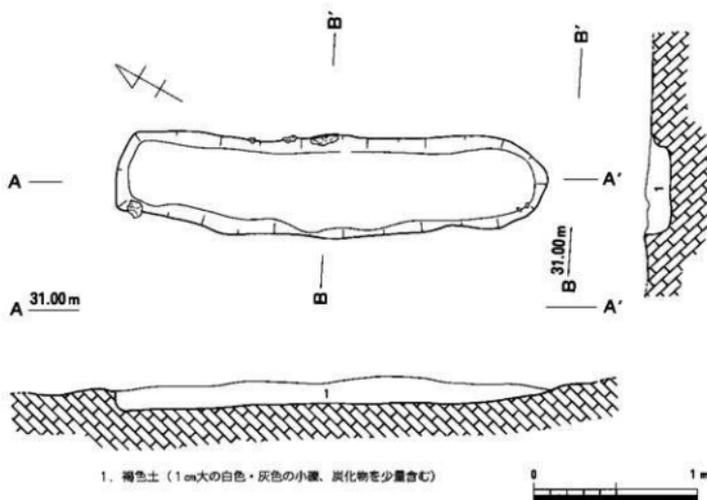


1. 黒褐色土 (表土)
2. 灰い黄褐色砂粘土
3. 灰い黄褐色土 (3cm~5cm次の層を少量含む)
4. 灰い砂粘土 (10cm次の層を少量含む)
5. 褐色土 (1cm~3cm次の層を少量、灰を少量含む)

31.00m
W



第12図 奥山2号墳丘土層断面図



第13図 奥山2号墳主体部実測図

(2) 2号墳

1号墳から北に続く標高30m余りの尾根は、約20m地点でわずかな高まりを持ち、その先の標高差約3mの鞍部へ落ちていくが、その最高所に築かれたのが本墳である。

〔墳丘〕

墳丘の盛上は一部を残して流失したものと見られ、墳形の判断はつかなかった。

南裾はわずかにそれとわかる程度の起伏をなしており、北裾は降り尾根の地山を削平して幅4.5m、長さ2mの三日月状のテラスを作り墳裾としている。南裾から北裾に至る南北の規模は約10m、高さは南裾から0.5m、北裾から1mを測る。なお墳丘の東側、西側には明瞭な墳裾は認められなかった。

頂部地山面の4×5m程の範囲をやや平坦に整形して墳丘基盤とし、そこに尾根に平行に主軸をとる墓壇を掘り込み、埋葬後盛土を施して墳丘を築成している。

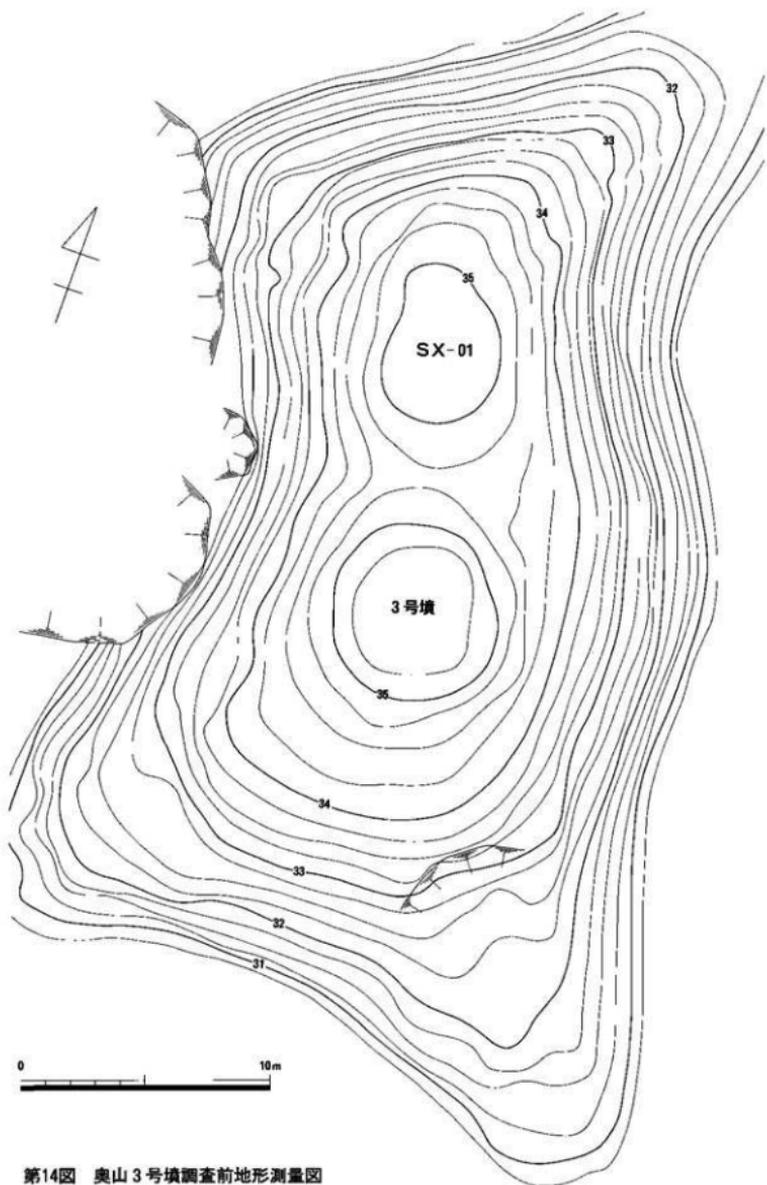
〔主体部〕

幅0.6m、長さ2.6m、深さ0.25mの長方形土壇を掘り込み墓壇としている。主軸はN-30°-Wである。木棺直葬かと思われるが、その痕跡は検出できなかった。

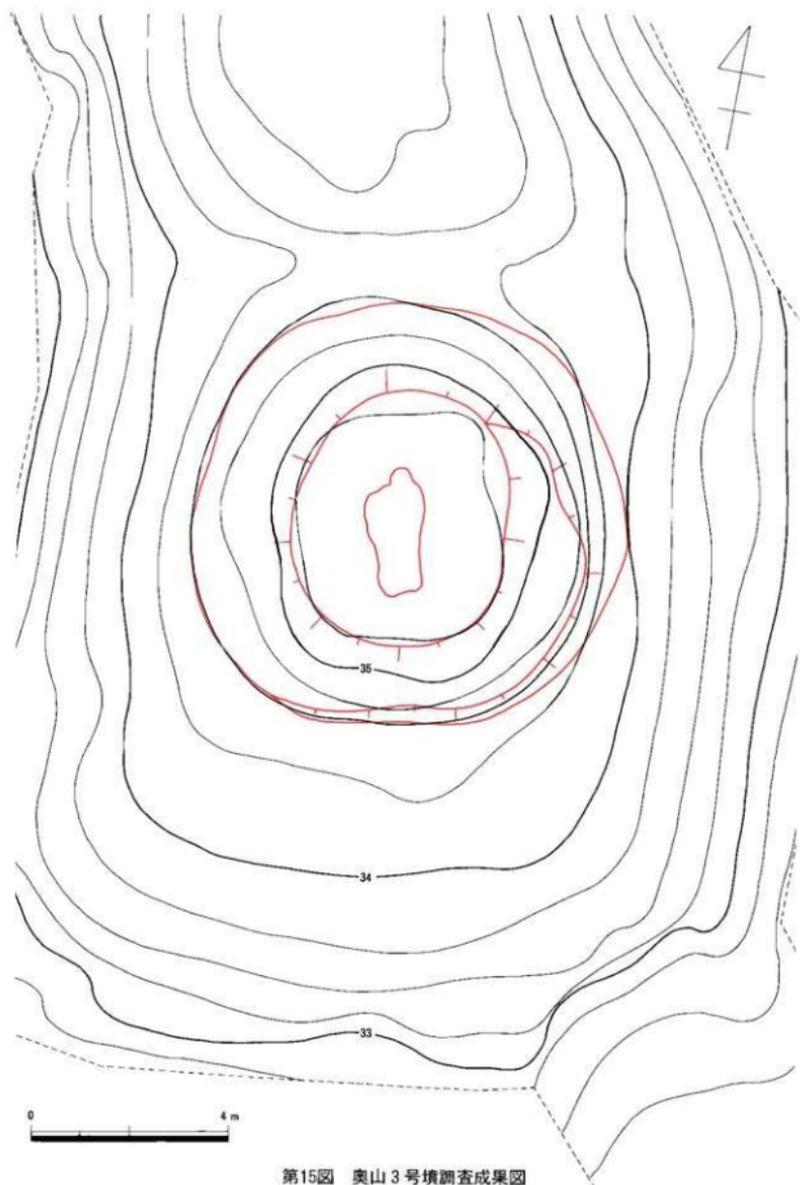
墓壇内から副葬品等の遺物は出上していない。

〔時期〕

出土遺物が無く、時期を判定できる根拠に乏しいが、1号墳が起伏の少ない尾根の中間地点にわざわざ築かれているのに対し、本墳が目立つ立地にあることを考えると、本墳が先に存在し、1号墳が後から築かれたものとするのが自然であろう。

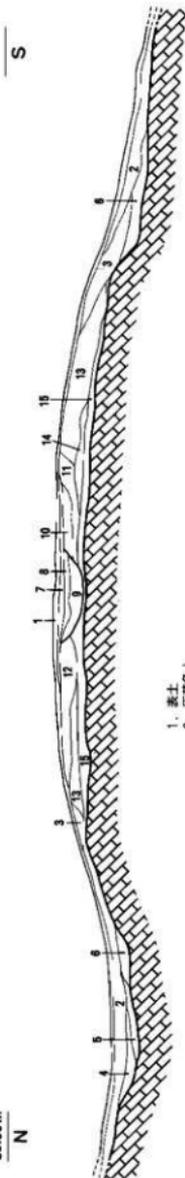


第14图 奥山3号墳調査前地形測量図



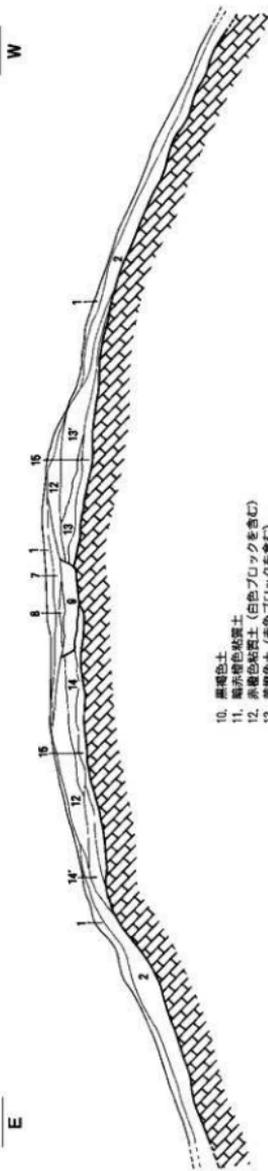
第15図 奥山3号墳調査成果図

36.00 m
N



1. 赤土
2. 灰褐色土
3. 赤い埴間色土
4. 赤褐色土
5. 暗褐色土
6. 黒味がかった暗褐色土
7. 暗褐色土
8. 褐色粘質土
9. 赤褐色粘質土 (黒色ブロックを多く含む)

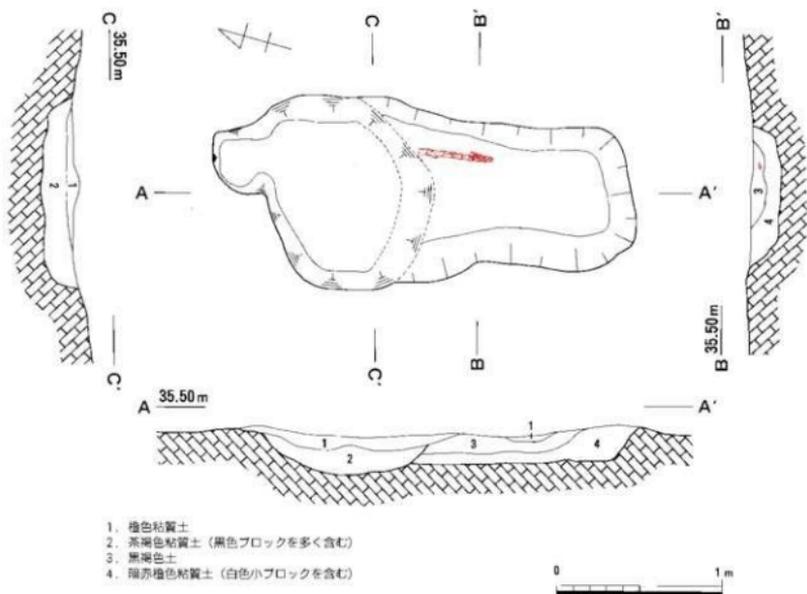
36.00 m
E



10. 黒褐色土
11. 細か褐色粘質土
12. 赤褐色粘質土 (白色ブロックを多く含む)
13. 真褐色土 (赤色ブロックを多く含む)
14. 山層よりも褐色が濃い
15. 山層より真褐色土 (山層) の混入土
16. 山層より真褐色土の割合が多い
17. 旧表土



第16図 奥山3号墳墳丘土層断面図



第17図 奥山3号墳主体部実測図

(3) 3号墳

本古墳群中の中央部、最高所に位置し、標高35.50mを測る。

〔墳丘〕

調査前測量時には方墳かと思われたが、調査の結果は直径8.3m、高さ0.9mの円墳であった。

3号墳が築かれた最高所は、もともと南北に細長い地形であったと思われるが、古墳を築造するにあたって、中ほどを溝で切断し、南側を墓域としたものである。

墳丘は旧表土面を某整として、旧表土面の直径約7.5mの範囲を残してその周囲は地山の厚みが0.5mになるまで削り落とされ、墳裾となっている。残された円形の旧表土上には周辺を削って出た赤褐色～黄橙色系の地山粘質土が0.4m盛り土されていた。墓壇はこの盛土上から掘り込まれており、墓壇底は中心部では旧表土に達するが端部では盛土中で終わっている。この墓壇の中にはおそらく木棺が納められたものと思われ、埋め戻しの後、さらに若干の盛土がなされ、墳丘が完成している。

〔主体部〕

築造当初は幅0.85m、長さ2.2m以下、深さ0.2mの長方形土溝の中に木棺が納められていたものと

思われるが、北側半分は擾乱を受けた後、また埋め戻されており、最大幅1.2m、深さ0.25mを測る。主軸はN-12°-Wにとる。

十竈検出面より数cm掘り下げたところで、鉄剣1口と鉄鎌2本が出土した。幸い擾乱部分にはかかっていなかった。棺側に置かれたものが、棺の腐朽とともに中に落ち込んだ状態と考えられる。棺内の遺物はなかった。

〔出土遺物〕

第18凶-1の鉄剣は切先が失われており、残存全長は39.5cmである。刃部残存長31.5cm、刃部幅3.0cm、関部は緩やかなカーブを描いてくりこまれ、茎部長8.0cm、茎部幅2.2~2.5cmを測る。茎尻から1.3cmと3.5cmのところに直径5mmの目釘穴があり、前者には目釘が残っている。また関から1.2cm刃部側に直径4mmの円孔がある。

2は片刃筋式の長頸式鎌である。茎の先端を僅かに欠損しており、残存長14.6cmを測る。鎌身部長は3.0cm、鎌身断面は二等辺三角形の平刃造で、鋭角に入りこむ逆刺をもつ。籠被部は段を持たず、茎部に向かって細くなる。頸部長は11.6cmである。

3は長頸式鎌の頸部である。鎌身部を欠損しており、両刃式であるか、2と同様の片刃筋式であるかは不明である。籠被部はやはり段を持たず、茎へ先細りするもので、残存長は10.0cmを測る。

〔時期〕

鎌身部長3cm前後の片刃筋式の長頸式鎌は古宮志大谷1号墳や山崎古墳に類例がある。いずれも5世紀後半代に位置付けられており、本古墳も同時期のものと考えられる。

参考文献 原 喜久子 「鳥根県における古墳時代の鉄鎌について」『鳥根考古学会誌』第10集 鳥根考古学会 1993年

(4) SX-01

3号墳の北側に隣接する標高35m余りの小高い場所を古墳想定地として調査したが、墳丘としての加工は認められず、古墳ではないと判断した。

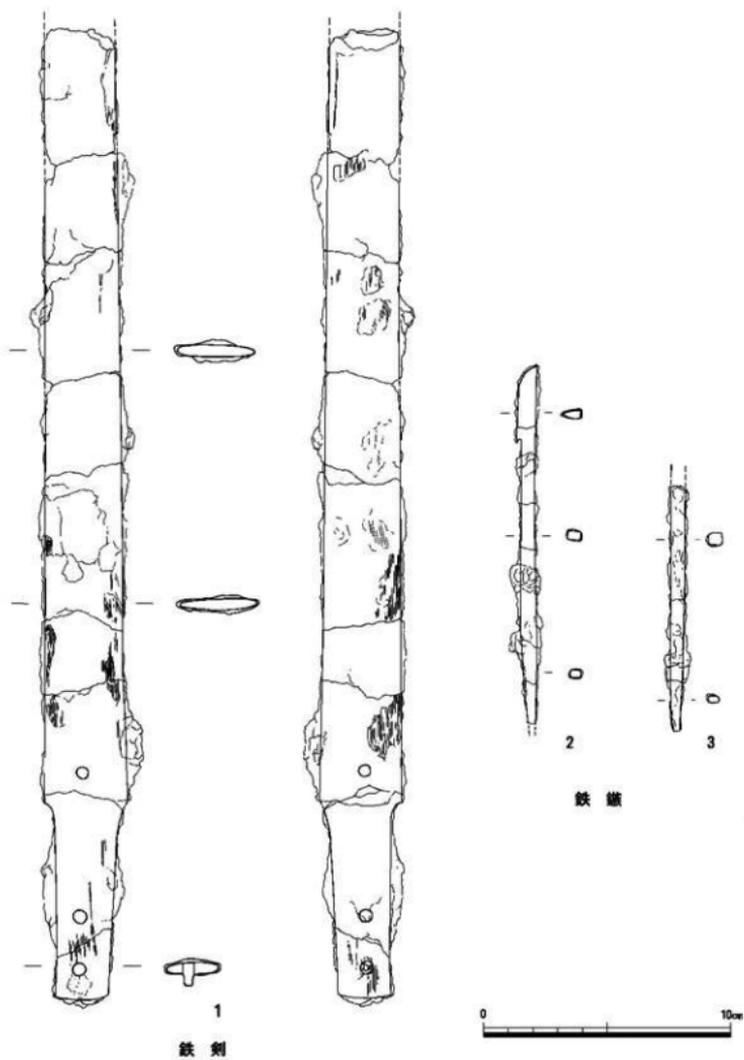
〔形態・規模〕

SX-01は頂部平坦面の西南寄りで検出した隅丸長方形の土壌である。直上に大きな木の根があったためにかなり掘り下げた時点で土壌の存在が判明し、底部近くがかるうじて検出できたものである。残存幅0.35m、残存長2.15m、深さ0.1mを測るが、古墳として調査するために設定した畦にかかって残った部分から推定すると、当初は幅0.7m、深さ0.3mはあったものと思われる。表土直下の地山から掘り込まれ、主軸はN-11°-Wにとる。

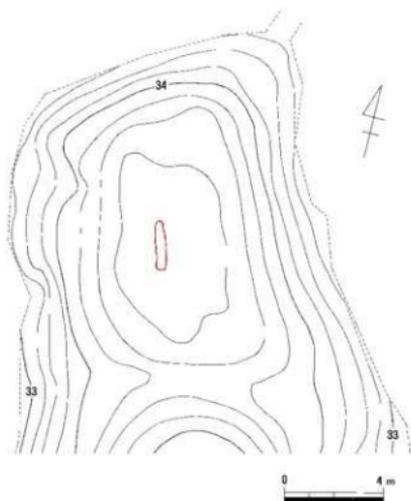
土壌内部、土壌周辺ともに遺物は出土していない。

〔性格・時期〕

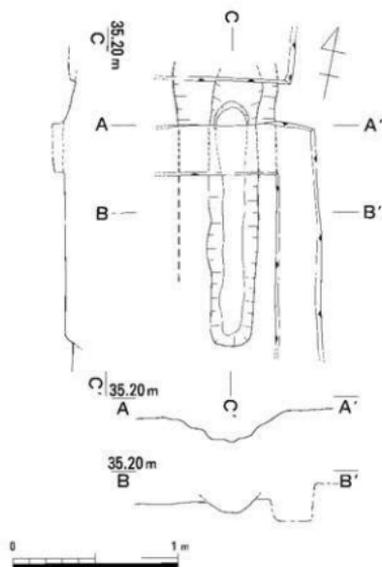
土壌の性格については、古墳群中の3号墳と並ぶ最高所に立地していることから、墓塚の可能性が高いと思われるが、隣接する3号墳との新旧関係ははっきりしなかった。



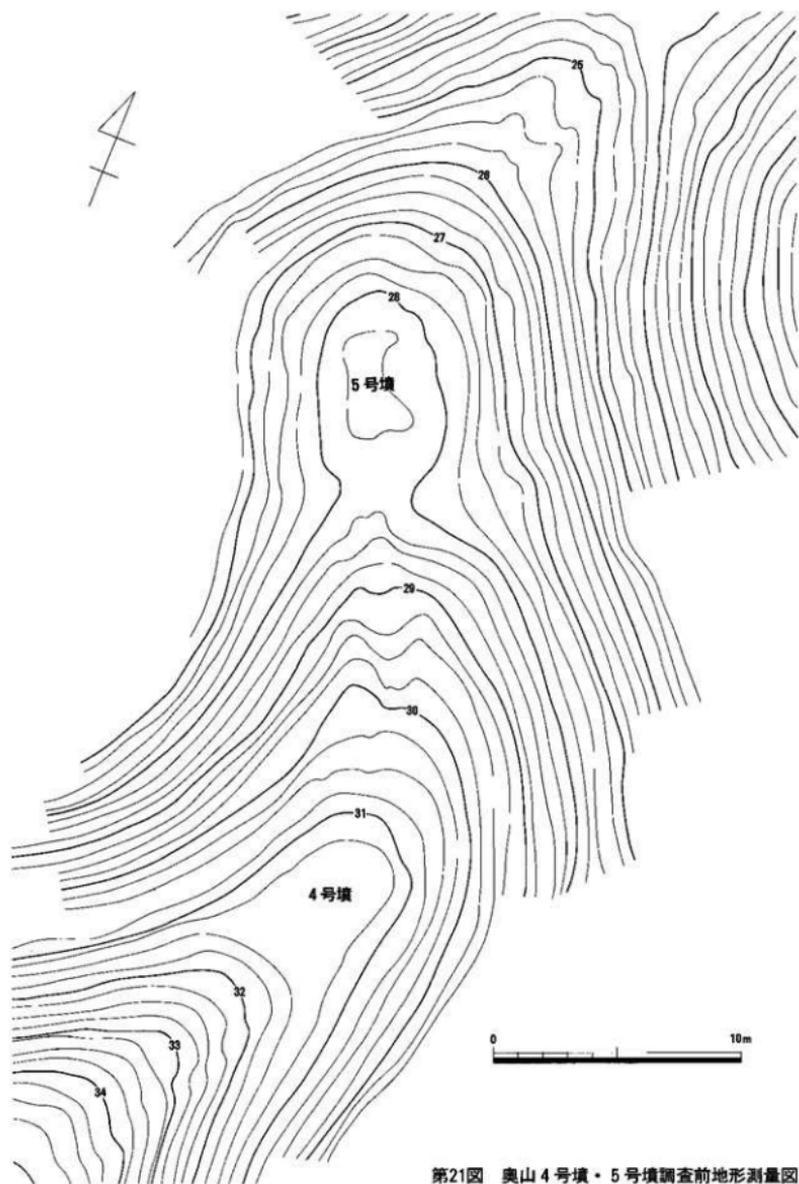
第18図 奥山3号墳出土鉄製品実測図



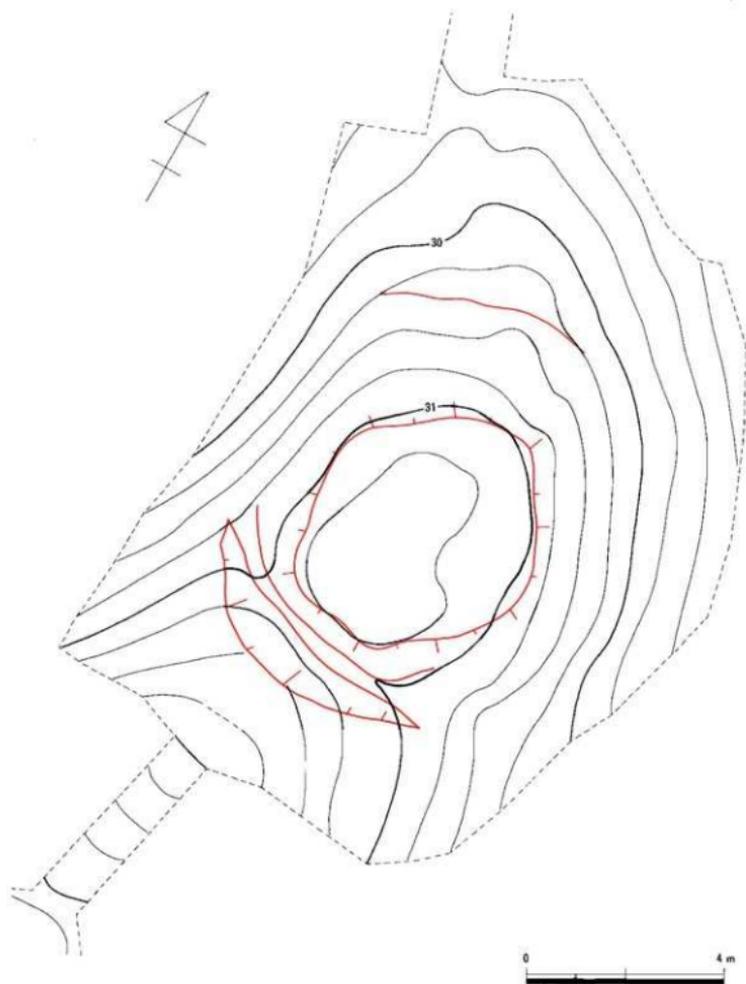
第19図 SX-01付近調査成果図



第20図 SX-01実測図



第21图 奥山4号墳・5号墳調査前地形測量図



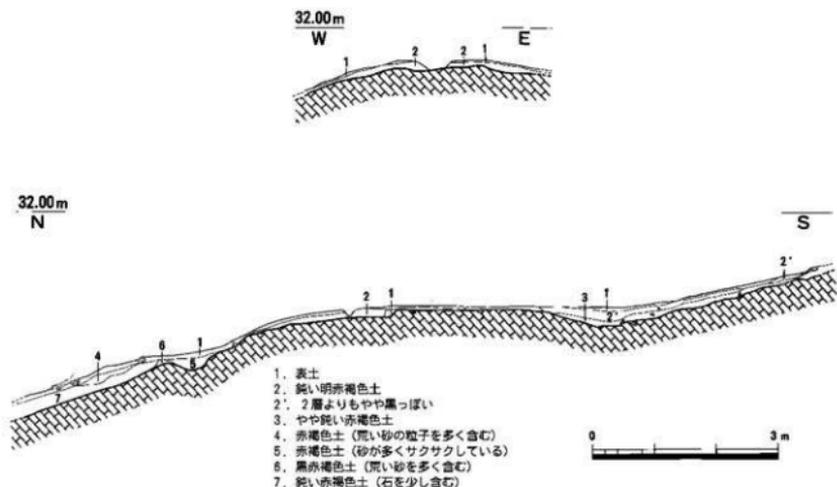
第22図 奥山4号墳調査成果図

(5) 4号墳

3号墳の所在する最高所から北に降った標高31.50mの地点に位置する直径7.5mの小円墳である。

〔概要〕

墳丘を含む周辺は表土除去後10cm程の鈍い明赤褐色土が堆積し明赤褐色土の地山に達した。堆積土



第23図 奥山4号墳丘土層断面図

は地山の風化土と思われ、古墳の盛土は確認できなかった。しかし、墳丘からは主体部が確認できなかったことから、築造当初は盛土を施しその中に主体部を設けていたのではないかと推測される。

墳丘南側に地山を切削加工した溝を検出した。溝は上端幅1.4m～1.7m、下端幅0.45m、深さ0.25m～0.3mを測り、断面形は緩やかなU字形を呈す。両端は円弧状に少し凹している。墳丘北側では地形の傾斜がやや緩やかになる変換点を墳裾とした。

この古墳からの遺物は皆無であり、時期を特定できる根拠は得られなかった。

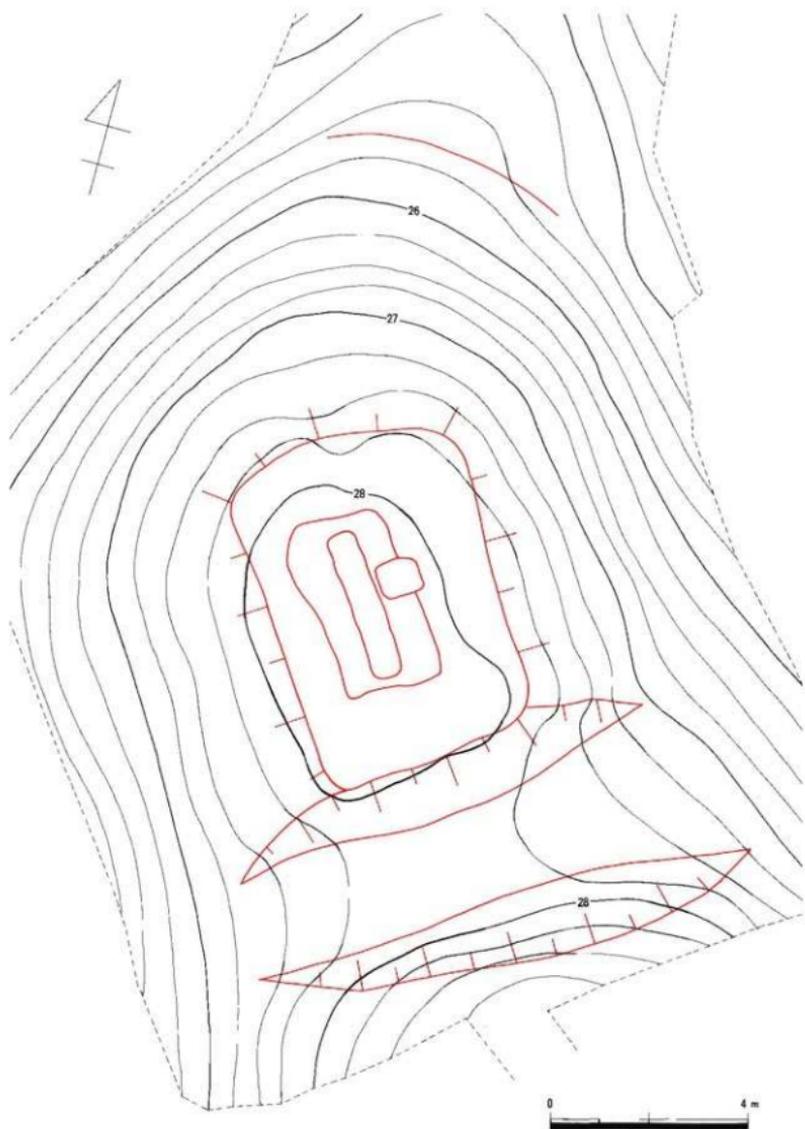
(6) 5号墳

4号墳より北北西へ降った尾根筋に位置し標高26mを測る。

〔墳丘〕

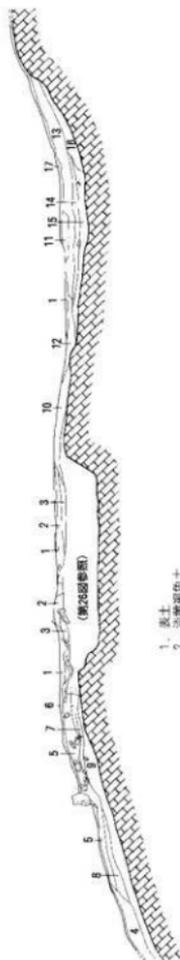
墳頂部は盛土の残存状況が悪く明瞭な規模を測れなかったが、南側の地形ラインが直線状で北側に向かい直角ぎみに回るため南北7.0m、東西4.5mの長方形を呈していたと思われる。南側に比べると北側のレベルが低いため、北側では原形を留めないほど著しく盛土が流失したと思われる。

墳丘南側は尾根を切断し溝を設け墳丘をきわだたせている。溝の規模は上端幅4.5m、下端幅2.8m、墳頂からの比高0.4mを測り、断面形を緩やかなU字形を呈す。東側、西側の墳裾は意図的に整形したと思われる地形を確認できなかった。北側についても同様に明瞭な墳裾は検出できなかったため、斜面の傾斜が若干緩やかになる地形の変換点を墳裾とした。墳頂からの比高は2.0mを測り、南北の



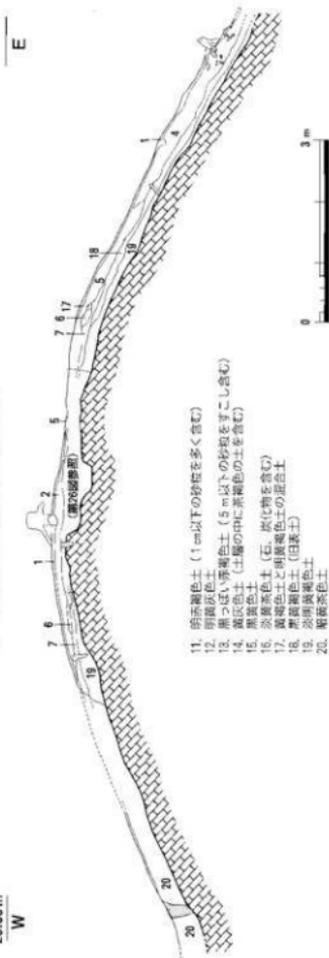
第24图 奥山5号墳調査成果图

30.00 m
N



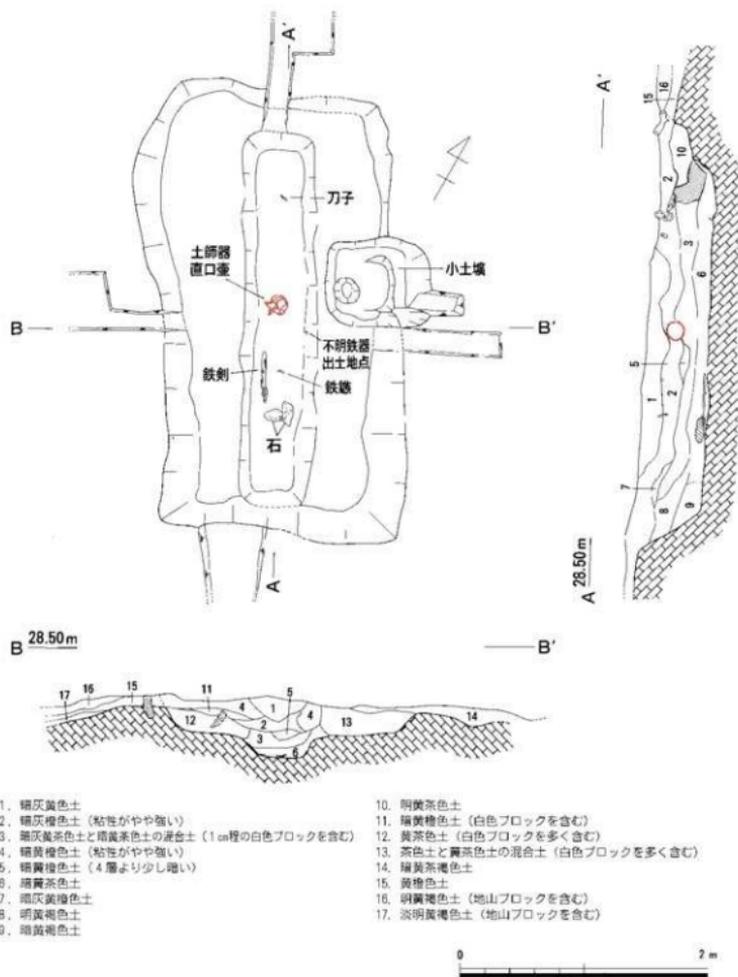
1. 黄土
2. 赤褐色土 (やや粗い)
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 明赤褐色土 (白色ブロックを含む、やや粗い)
7. 黄褐色土 (やや粗い)
8. 灰褐色土 (白色小ブロックを含む)
9. 赤黄褐色土 (白色ブロックを含む)
10. やや粗い 黄褐色土 (黄色の小石を含む)

20.00 m
W



11. 明赤褐色土 (1 m以下の砂粒を多く含む)
12. 明赤褐色土
13. 黒っぽい 赤褐色土 (5 m以下の砂粒を多く含む)
14. 黄褐色土 (土層の中に赤褐色の土を含む)
15. 黄褐色土
16. 黄褐色土 (正、砂粒が粗い)
17. 黄褐色土 (砂粒が粗い)
18. 赤黄褐色土 (白土)
19. 赤黄褐色土
20. 明赤褐色土

第25図 奥山5号墳填土層断面図



第26図 奥山5号墳主体部実測図

規模は約12.0mを測ることとなる。墳丘は築造当初より高低差のある北、東、西側にはあまり手を加えずに自然地形を充分に活用し、墳頂部のみを整形し築造されたものと推測される。

築造手順は、まず墳頂部の旧表土を削り地山面をある程度整地し墳丘基盤としている。次に墳頂部に粘性の黄褐色土を盛土して平坦面を整形し草壇を掘り込んでいる。盛土はレベルの低い北側に厚く

盛られ南側に行くほど薄く盛られている。特に北側の西角で20cm～25cmと最も厚く盛られ、北側の東角で8cm～15cm、東側、西側で3cm～12cmを測る。南側において盛土はほとんどなく、墓壇の掘り込みも地山面からであった。埋葬後はこの黄褐色上に類似する盛土を施し、さらに黄褐色土を盛土したと思われる。

〔主体部〕

墳頂部平坦面の中央に主軸をN-27° Wにとる二段掘りの墓壇を検出した。規模は長さ3.6m、上端幅1.8m～2.1m、深さ0.5mを測る。木棺を安置する為の内側の掘り込みは、墓壇中央に主軸を同位にして掘り込まれている。規模は長さ3.0m、上端幅0.58m～0.6m、深さ0.15mを測る。南側の小口辺には段を有していなかった。

墓壇底部は平坦に整形されておりレベルの差異はほとんどなく、下端幅も0.36m～0.42mとほぼ均一に掘り込まれている。この状況から頭位を考察することは困難であったが、底部南側より枕石と思われるL字状に組み合わせられた15cm～20cm程の石を2個検出したため、頭位は南東に置かれていたものと推測される。底部からの出土遺物は鉄剣1口、鉄鎌1本、刀子1口、不明鉄器1個であった。鉄剣、鉄鎌、刀子は底部より2cm～3cm程浮いた状態で出土しており、遺体の上に置かれたものと考えられる。また刀子は切先を下に斜めに落ち込んでおり棺上に置かれていた可能性も考えられる。不明鉄器は墓壇中央の東側側壁に位置し底部からは7cm程浮いた状態であった。

埋上からは土師器直口壺が1個体出土し、埋葬後盛土を施す前に置かれた供献上器と思われる。

〔出土遺物〕

28図-1の直口壺の体部は比較的良好な残存状況であるが、口縁部は1/3程度で端部を欠損している。器高は17.3cm（推定）、口径10.6cm（推定）、頸部径9.4cm、胴部最大径15.9cmを測る。頸部は緩やかに「く」の字に屈曲し、口縁部はやや外傾してまっすぐ伸びる。胴部は肩が張らず胴部最大径に達し、底部にかけて丸みを帯びるやや偏平な型を呈している。外面の調整は頸部から口縁部にかけて若干ナデ調整が見られるが、全体的に風化が著しいため不明である。内面の調整は頸部から口縁部にナデ調整、胴部上方に横方向のヘラ削り、胴部下方にヘラ削り後ナデ調整が施されている。底部には深い指頭止痕が残っている。胎上中には1mm～2mm程の砂粒を少し含み、色調は褐色から黄褐色を呈している。

29図-1の鉄剣は全長42.4cm、剣身長31.8cm、最大刃幅0.5cm、茎長10.6cm、茎幅1.5cm～2.4cmを測る。茎尻より1.6cmと6.3cmのところに径6mmの目釘穴が穿たれている。刃は浅く直角に切れ込み茎は茎尻に向かってまっすぐ細くなり茎尻を丸く整えている。茎上部より剣身中ほどにかけては若干の木質が観察され、副葬時には鞘に納めてあったものと思われる。

29図-2の鉄鎌は錆化が著しく明瞭な形状を知ることが困難であったが、鑿箭式の長頸式鎌ではないかと思われる。残存長5.2cm、鎌身長2.1cm（推定）を測り、明瞭な関は持たずに筥被部へと続く。茎は欠損しているため不明である。

29図-3の刀子は残存長7.6cm、刀身長5.0cm、元幅1.2cmを測り、ほぼ完型で出土した。関から茎にかけては柄と思われる木質が観察される。そのため形状は確認できなかった。

また棺底から出土した不明鉄器(図版21)は、錆化が著しく細微であった。径2mm程の針金状のものと思われ、先端部を折り返し長さ8mm程の細長い輪を作っているようである。

〔時期〕

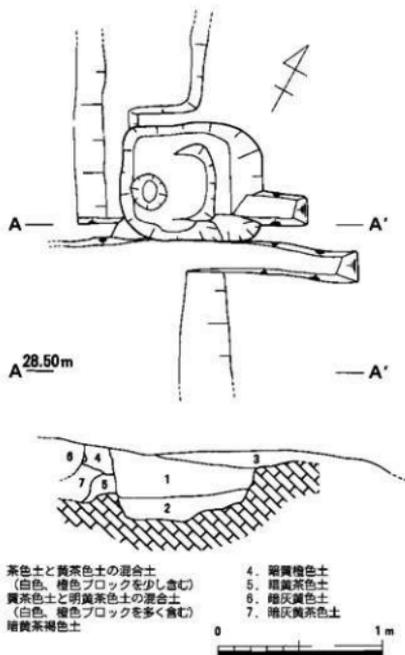
墓域内で出土した土師器の直口壺は、類例を安来市の渋山池1号墳にみることが出来る。胴部がやや扁平し、口縁はまっすぐに開く形態で松山編年IV期(注1)に位置づけられている。また、棺底より出土した鉄剣は、剣身長から短剣に属するものである。池淵俊一氏の論考(注2)によると、茎・閃の形態は中細茎、浅直・斜角閃タイプであり若干古墳時代中期後半にも見られると考えられている。これらのことより本古墳の築造は古墳時代中期後半と考えられる。

〔小土壌〕

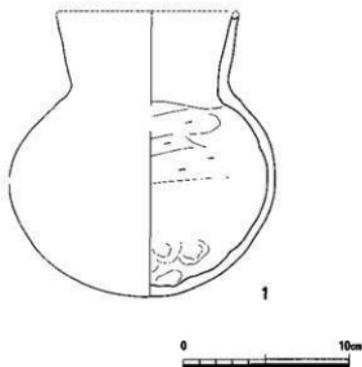
この土壌は墓域中央東側において検出された。規模は南北0.7m、東西0.85m、深さ0.4mを測り、平面形は方形を呈す。土壌は墓域の盛土より掘り込まれており、底部は不整形で段を有するところもある。後世に掘り込まれたものと思われるが、遺物が出土していないため時期や性格は不明である。

参考文献

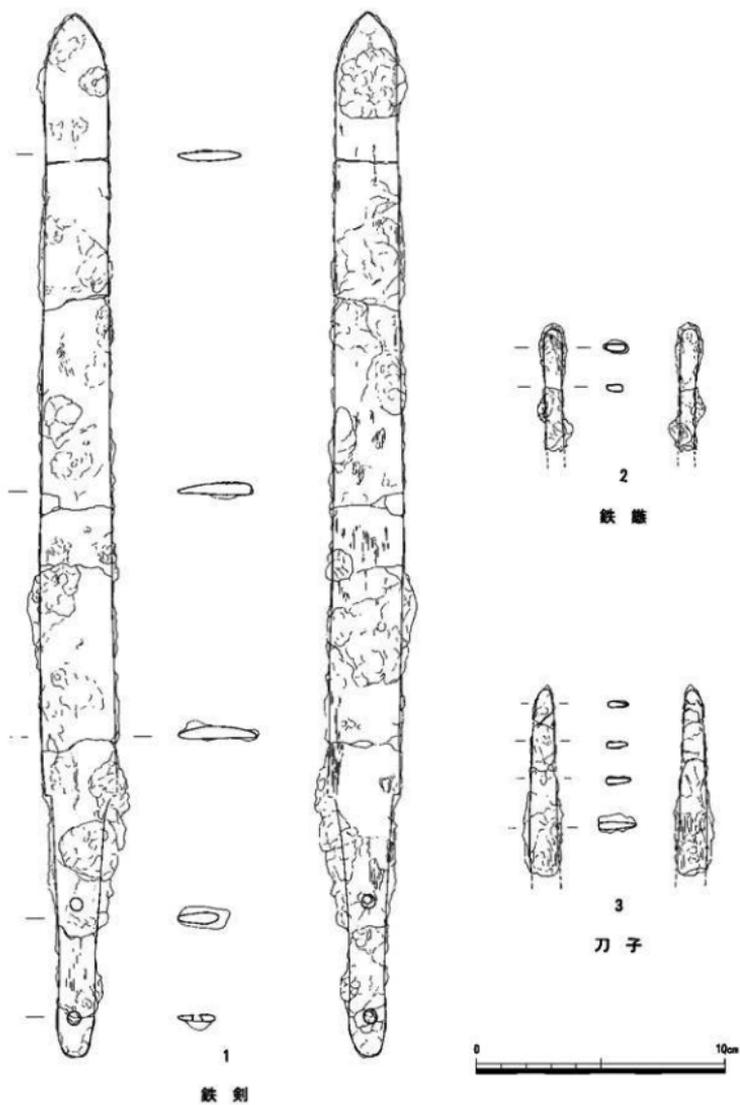
- 注1 松山智弘 「山雲における古墳時代前半期の土器の総観」『鳥根考古学雑誌』第8集 鳥根考古学会 1991年
- 注2 池淵俊一 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究 第1号』鳥根編古代文化センター 1993年
- 原 喜久子 「鳥根山における古墳時代の鉄剣について。」『鳥根考古学雑誌』第10集 鳥根考古学会 1993年



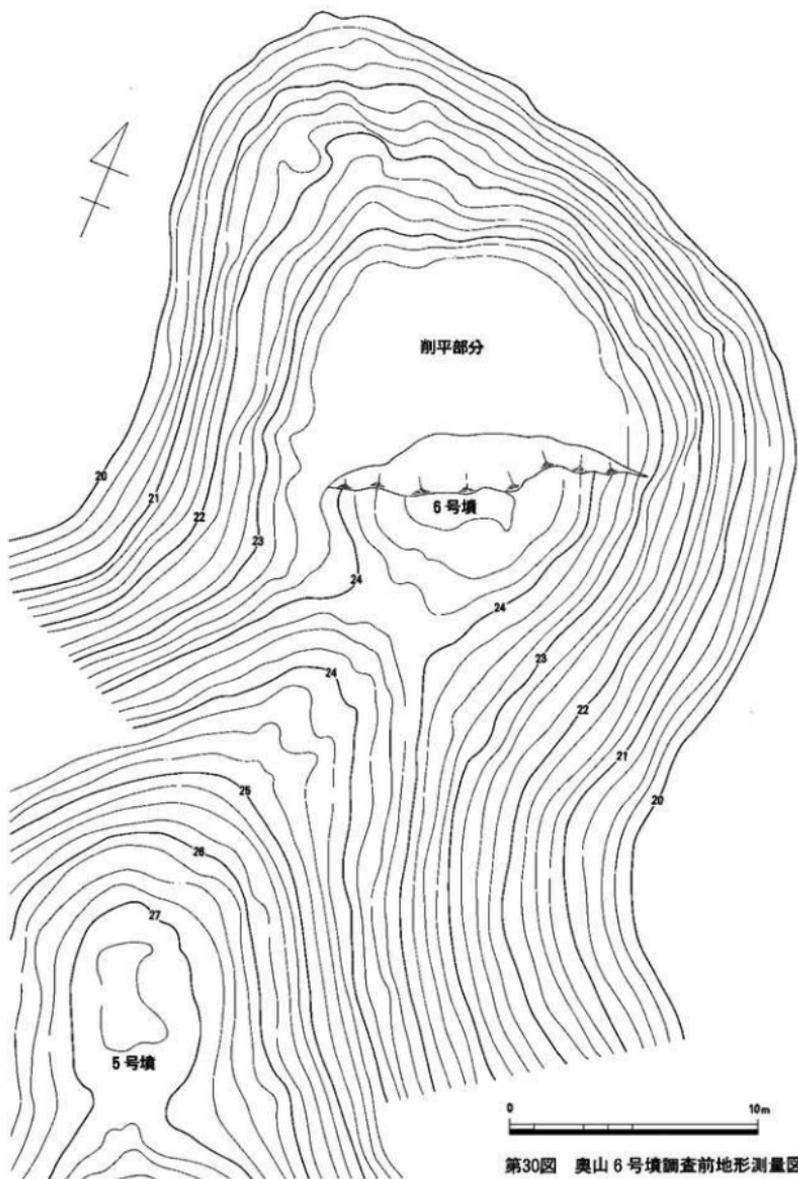
第27図 奥山5号墳小土壌実測図



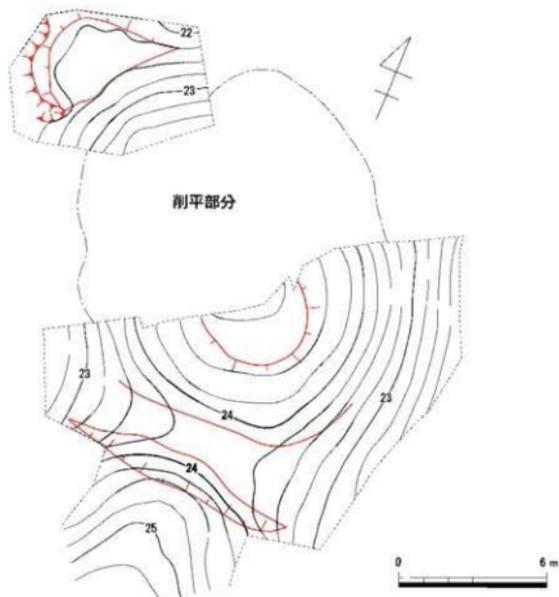
第28図 奥山5号墳出土土師器：直口壺実測図



第29図 奥山5号墳出土鉄製品実測図



第30图 奥山6号墳調査前地形測量図



第31図 奥山6号墳調査成果図

(7) 6号墳

5号墳より北に降り尾根の先端に位置する。標高25.0mで低地を望む見晴らしの良い立地である。

〔概要〕

運動公園造成以前にはこの場所に鉄塔が設置されていたようで、墳丘の半分は削平されている。主体部もこの部分に設けられていたと思われ、すでに破壊されたものか確認できなかった。

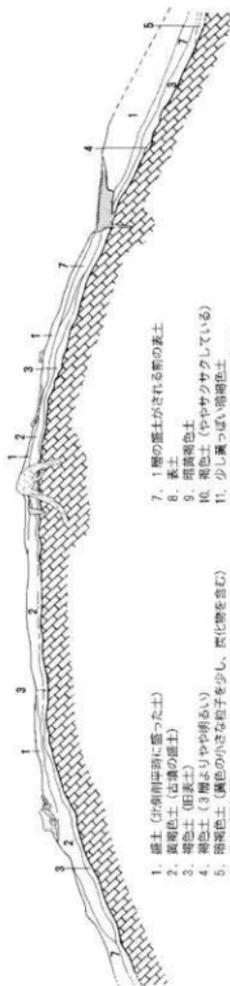
残丘部分の東西土層断面より地山上一層に旧表土を確認した。その直上には厚さ10cm～20cmの黄褐色土層が径約11.0mにわたって堆積しており、これが古墳の盛土と考えられる。

溝は墳丘南側に切られており、上端幅4.5m、下端幅1.5m～2.4m、深さ0.6m～0.66mを測る。断面形は緩やかなJ字形を呈す。また北側の墳裾には半月状の平坦面を造っており、長さ5.2m、最大幅2.8mを測る。残丘部分を調査した限りでは南北約15mの円墳ではないかと思われるが、部分的な調査で確かなことは言えないので墳形は不明としておく。

〔時期〕

出土遺物が一点もないため時期は特定できないが、溝に堆積した暗黄褐色土(第32図9層)は5号墳の墳丘盛土が流出したものと思われ、本墳は5号墳に先立ち築造されていた可能性もうかがえるのではないだろうか。

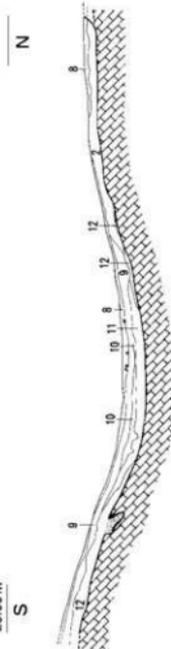
26.00 m
E



1. 盛土 (江有田平野に盛った土)
2. 黄褐色土 (古墳の盛土)
3. 埴色土 (旧武土)
4. 埴色土 (3層よりやや明るい)
5. 埴色土 (黄色の小さな石子を少し、灰化層を含む)
6. 北山 (図次巻)

7. 1層の盛土がされる前の表土
8. 表土
9. 暗黄褐色土
10. 赤色土 (ややサクサクしている)
11. 少し厚っぽい暗褐色土
12. 白色の地山アロックスを含む土

26.00 m
S



0 3 m

第32図 奥山6号墳墳丘土層断面図

IV 小 結

調査の結果、1号墳、5号墳の方墳2基、3号墳、4号墳の円墳2基、2号墳、6号墳の墳形不明2基の計6基と土壌1基を検出した。このうち比較的遺存状態のよかった主要な古墳の墳丘規模は1号墳が6.4m×5.6mの方墳、3号墳は直径8.3mの円墳、5号墳が南北長12.0mの方墳であった。(他はP.4の表1に記す)

6基の古墳中、主体部が確認できたのは、1号墳、2号墳、3号墳、5号墳の4基であった。いずれも木棺直葬と思われるが、その痕跡を残すものは1基も確認できなかった。

墓壇の規模に注目して見ると、1号墳、2号墳、3号墳が長軸2m前後の素掘りの墓壇であるのに対し5号墳は様相を異にし、長軸3.6m、短軸2.0mと長大で内側に木棺を安置するための掘り込みを持つ2段掘りの墓壇であった。

5号墳の墓壇には底部の南東側に枕石が置かれており本古墳群中で唯一頭位を考察できるものであった。副葬品も6基中唯一納められており、底部よりやや浮いた状態で鉄剣1口、鉄鍔1本、刀子1口が出土している。(但し3号墳は主体部の北側1/3程度を後世に盗掘と思われる擾乱を受けており副葬品があった可能性もあることを書き示しておく。)中期の古墳で枕石を置く例はあまり知られていないが、馬潟町の観音寺2号墳(註1)、八雲村の増福寺20号墳(註2)に見ることができる。いずれも中期後半の築造年代に位置付けられ、墳丘規模、内部主体、出土遺物の様相が古墳群中傑出しており、被葬者が古墳群中かなりの地位にあったであろうと考えられている。このことは5号墳も同様であり、5号墳の被葬者が本古墳群において際立った存在であったことが推測される。

出土遺物は5号墳の副葬品の他、1号墳より土師器の環3個体、3号墳より鉄剣1口、鉄鍔2本、5号墳より土師器の直口壺1個体が出土している。これらはいずれも築造当時に供献されたものと考えられ、古墳の築造年代を考察しえるものであった。1号墳の土師器の環と5号墳の土師器の直口壺は松山編年Ⅳ期(註3)の範囲に含まれるもので、築造時期を古墳中期後半と推定される。しかし、1号墳の環は当該期の環と比較すると口径の小径化と口縁の内湾が著しい特徴が観察されるため、やや新しい時期に降る可能性も考えられる。3号墳の片刃箭式の長頸式鍔(註4)は、鍔身長が3cm前後の一般的なタイプのもので、これが最も盛行する山陰須恵器編年のⅠ期(註5)に併行するものと考えられる。このことより3号墳の築造年代は古墳中期後半と推定される。以上のように遺物の年代観から考察すると1号墳、3号墳、5号墳は同時期に相前後して築造されたものと推測される。築造順序は、比較遺物の種類が不揃いのため決定づける根拠が得られなかった。但し1号墳は環の年代観より3号墳、5号墳よりも後に築造された可能性も考えられる。

また、1号墳山上の土師器の環は北側の墳裾となる溝底に接し、3個体が並べ置かれた状態で出土しており、葬送の祭祀が執り行われたことが窺われる。近隣でこのように土師器の環を並べ置く例は八雲村の増福寺24号墳(註2)に見られ、土師器の高環を並べ置く例は同村の増福寺2号墳(註6)、23号墳と東出雲町の洗山池3号墳(註7)に見ることができる。いずれも中期後半の築造年代に位置

付けられており、墳丘上で行われた土器供献行為の他に、墳塚、溝内でも祭祀行為が行われるようになったとも考えられている。よってこれらは当該期における祭祀行為の変様を解明するうえでの貴重な資料となり得るものであろう。

被葬者については前述のごとく5号墳が他を圧しているのは言うまでもないが、3号墳は本古墳群最高所に立地し、鉄剣、鉄鏡といった武器類が供献されていることから、これも重要な位置にあったのではないと思われる。また本古墳群北端に立地する6号墳は、後世の削平により墳丘の半分以上を失っており、墳丘規模の推定調査に留まったが、その規模径15mの円墳であったのではないかと推測される。そのため6号墳は本古墳群最大規模になる様相であり、5号墳と同等以上の被葬者が埋葬された可能性があり注意される。

本古墳群を形成する集団は、これまで発見された周辺の中期古墳を考察に加え、墳丘規模、副葬品、供献品の質的、量的な観点から見ると際立った特徴も見られず、地域を掌握するような強い権力集団とは考え難い。むしろ当地を掌握する豪族集団と主従関係にあり、周辺の谷部で農耕などを生産基盤として生活し累代的に営まれた小規模な地域集団ではないだろうか。

また運動公園造成以前の古墳群周辺の地形は、西方に南北に伸びる田園地帯が広がり幅の広い谷地形を早していた。ここに生活基盤があったのではないかと考えられる。東方は幅狭な尾根筋が南北に伸びていた。この尾根筋は本古墳群と小規模な谷続きになっており、7号墳の南西に位置する標高40mの丘陵上で合流する。ここにも何基かの古墳が存在していた可能性があり、本古墳群の規模はもう少し拡大していただろうと考えられる。

今回の調査では、削平のため6号墳の全容が掴めなかったことなど惜まれる点もあるが、一方で1号墳、3号墳、5号墳といった比較的遺存状態の良い古墳にも恵まれ、本古墳群の実態について主要な部分を明らかにでき、今後乃木地区の古墳時代中期の墓制を検討していくうえで貴重な資料を得ることができたものであった。

参考文献

- 註1 「Ⅱ 松江・観音寺古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第IV集 島根県教育委員会社会教育課 昭和47年3月
- 註2 「増福寺古墳群発掘調査報告書 昭和56年度」八雲村教育委員会 昭和57年3月
- 註3 松山智弘 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会 1991年
- 註4 原喜久子 「島根県における古墳時代の鉄鏡について」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 1993年
- 註5 山本 清 「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』1960年
- 註6 「増福寺古墳群発掘調査報告書 昭和55年度」八雲村教育委員会 昭和56年3月
- 註7 「浜山池古墳群」建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1998年3月
- 「古曾志遺跡群発掘調査報告書 朝日ヶ丘岡地造成に伴う発掘調査」島根県教育委員会 1989年
- 「山崎古墳」松江市教育委員会 1984年3月

圖 版



1号墳調査前全景
(南東より)



1号墳主体部検出状況



1号墳主体部土層断面



1号墳主体部完掘状況



1号墳土師器：坏出土状況
(左下)



1号墳土師器：坏出土状況



1号墳完掘状況（北より）



10-1



10-2



10-3

1号墳出土土師器：坏



2号墳調査前全景
(北より)



2号墳主体部検出状況



2号墳主体部土層断面



2号墳主体部完掘状況



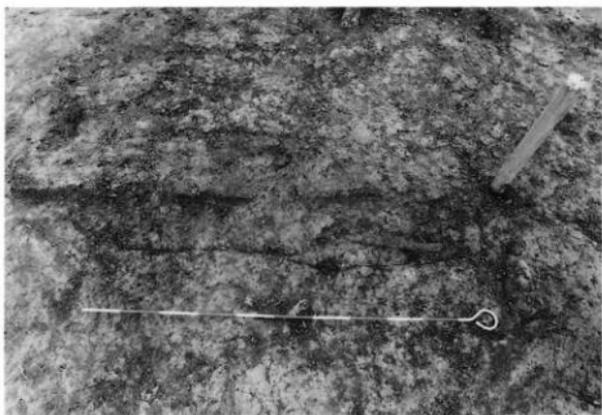
2号墳増丘東側土層断面



2号墳完掘状況遠景
(北より)



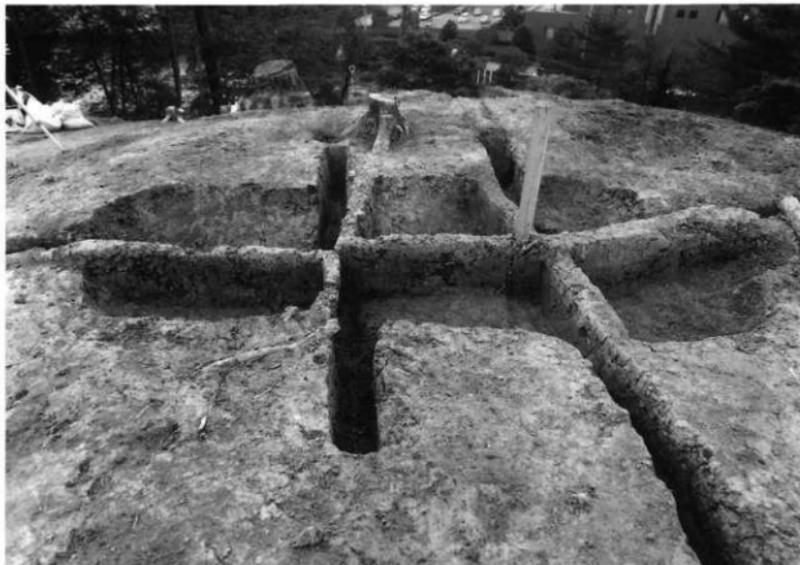
3号墳調査前全景
(南より)



3号墳主体部検出状況



3号墳鉄製品出土状況
(鉄剣・鉄鍔)



3号墳主体部土層断面（南北）



3号墳主体部土層断面（東西）



3号墳主体部盜掘擴完掘狀況



3号墳主体部完掘狀況



3号墳西侧墳裾土层断面



3号墳完掘状況遠景（南東より）



3号墳完掘状況近景（南東より）



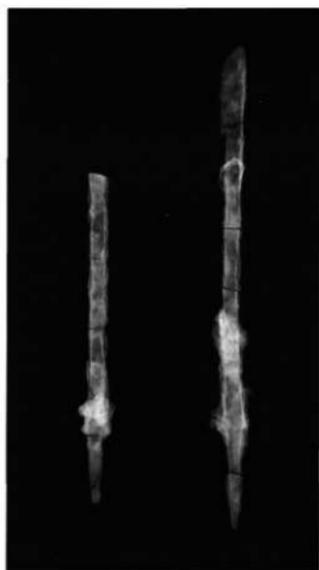
3号墳墳丘基盤（南東より）



18-3



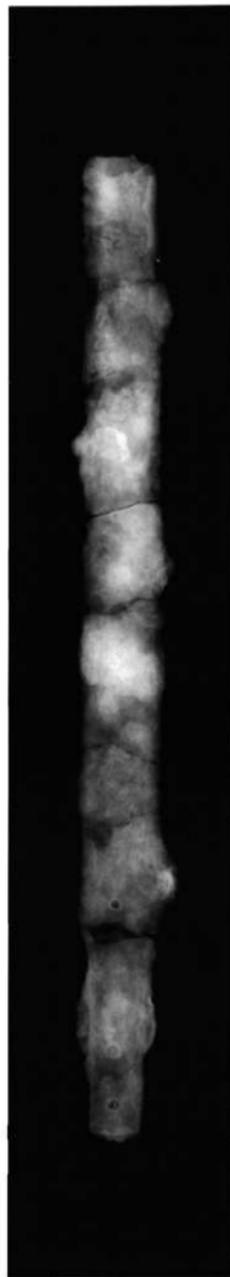
18-2



3号墳出土鉄製品：鉄鏃



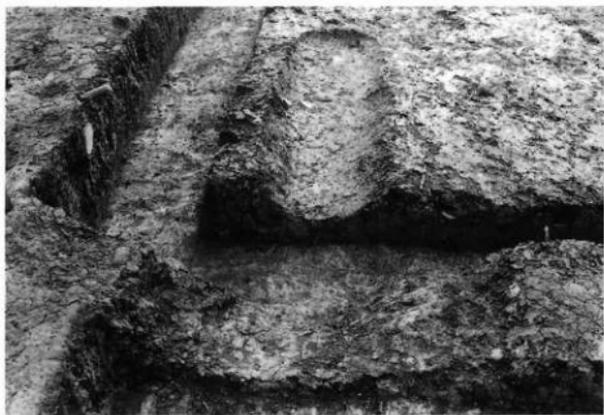
18-1



3号出土铁制品：铁剑



S X-01検出状況



S X-01完掘状況
(北北西より)



S X-01完掘状況
(南より)

4号墳調査前全景
(南より)



4号墳南側の溝検出状況



4号墳南側の溝完掘状況





4号墳完掘状況
(南西より)



5号墳調査前全景
(南東より)



5号墳主体部検出状況



5号墳主体部土層断面（東西）



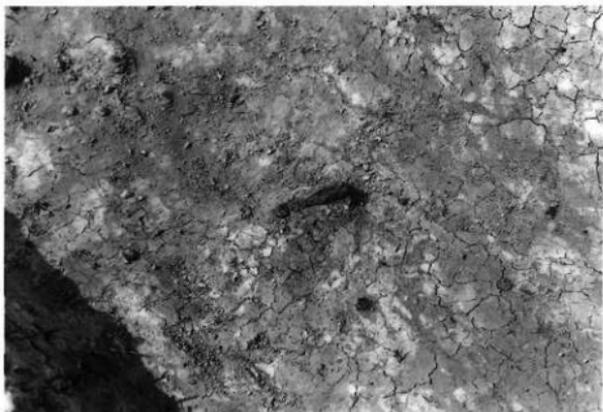
5号墳主体部土層断面（南北）



5号填土陶器：直口壺出土狀況



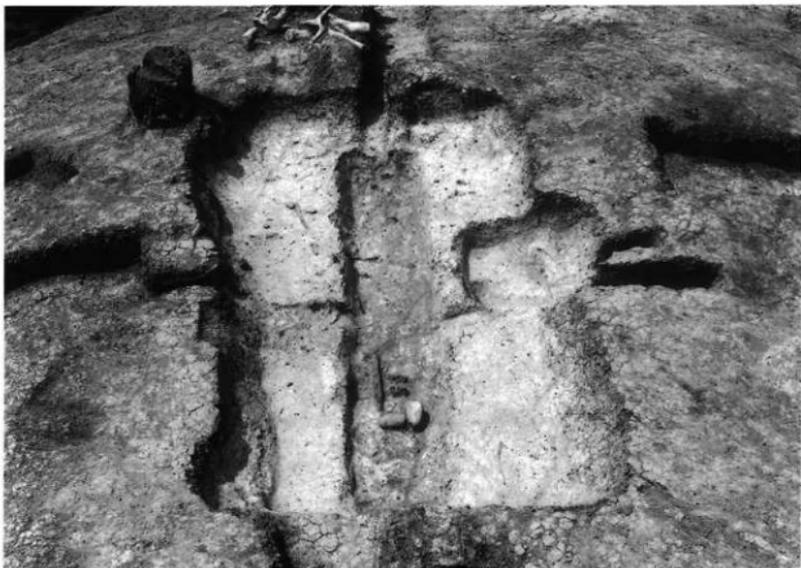
5号填鉄剣出土狀況



5号填鉄刀子出土狀況



5号墳 鉄剣、鉄鍬、石出土状況



5号墳主体部完掘状況（北東より）



5号墳墳丘北側土層断面



5号墳墳丘南側の溝土層断面



5号墳墳丘南側の溝検出状況



5号墳完掘状況遠景（南より）



5号墳完掘状況近景（南東より）



5号墳墳丘基盤
(南より)



5号墳小土塚検出状況



5号墳小土塚完掘状況



28-1

5号墳出土土師器：直口壺



29-3

刀子



29-2

鉄鏃

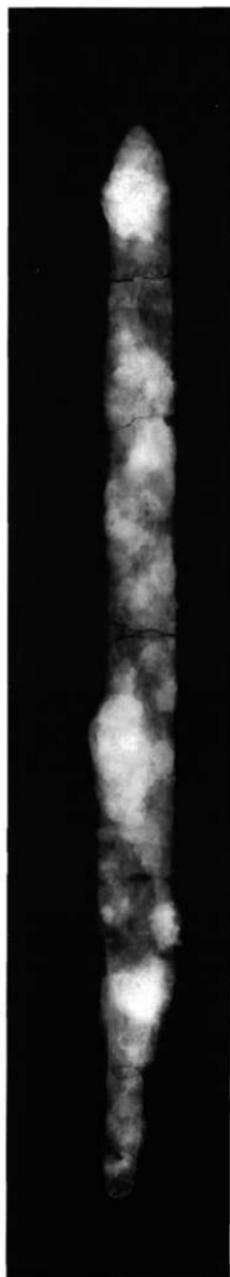


不明鉄器

5号墳出土鉄製品



29-1



5号墳出土鉄製品：鉄剣

6号墳調査前全景
(南より)



6号墳南側の溝検出状況



6号墳南側の溝完掘状況





6号墳填丘西側墳裾完掘状況



6号墳完掘状況遠景
(南より)



6号墳完掘状況近景
(南東より)

報告書抄録

ふりがな おくやまこふんぐんはくつちょうさほうこくしょ								
書名		奥山古墳群発掘調査報告書						
副書名								
巻次								
シリーズ名		松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第90巻						
編著者名		広江光洋						
編集機関		松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地		〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 Ⅷ 0852 (55) 5294						
		〒690-0886 島根県松江市母衣町180-21 Ⅷ 0852 (28) 2065						
発行年月日 2001年(平成13年)9月30日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奥山古墳群 <small>おくやまこふんぐん</small>	島根県 松江市 上乃木 <small>しまねけん まつよしし かみのぎ</small>	32201	D-026			2000.12.4 ～ 2001.6.25	1,800㎡	土地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
奥山古墳群	古墳	古墳時代中期		古墳	土師器(壺、坏) 鉄製品 (剣、鎌、刀子)			

奥山古墳群発掘調査報告書

2001年9月

発行 松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 御黒潮社
松江市向島町182-3